

平成8年度
国立婦人教育会館
主催事業実施報告書



国立婦人教育会館

目 次

◇ はじめに	1
◇ 研修事業	
婦人教育施設職員のためのセミナー	2
海外婦人教育情報専門家情報処理研修事業	8
フォーラム家庭教育	14
国立婦人教育会館出前講座	16
女性に関する情報担当者研修会	22
NWECC（国立婦人教育会館）アドバンスコース	26
公開講演会	32
女性の教育問題担当官セミナー	36
◇ 交流事業	
女性学・ジェンダー研究フォーラム	38
女性の国内交流集会	44
国際交流フォーラム	48
◇ 調査研究事業	
開発と女性に関する文化横断的調査研究	54
都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究	57
社会教育における女性学教育の内容と方法に関する調査研究	58
女性及び家族に関する統計の調査研究	60
マルチメディア利用の対話型遠隔講座	66
◇ 国立婦人教育会館ボランティアの活動	72

はじめに

国立婦人教育会館では、男女共同参画社会の形成をめざし、今年度も婦人教育・家庭教育の振興を図るため、女性及び家族をめぐる諸課題について、研修・交流・情報・調査研究の4つの機能を軸に数多くの事業に取り組んでまいりました。これらの事業の成果を広く社会に普及すると共に、当館に対し、ますますのご理解を頂くために、「平成8年度国立婦人教育会館主催事業報告書」を作成いたしました。

今年は開館20周年を迎えることになり、愛称を公募し「ヌエック」と決定しました。国立唯一の婦人教育会館として、より一層の事業運営の充実を図って参りたいと思います。

本冊子が女性の生涯学習関連施設をはじめ、婦人教育・家庭教育に関する機関や婦人教育・家庭教育行政担当者等関係者の皆様方に参考資料として有意義にご活用いただければ幸いです。

平成9年3月

国立婦人教育会館長 大野 曜

婦人教育施設職員のためのセミナー

1. 趣 旨

男女共同参画社会の形成を目指した生涯学習の促進を図るため、公立婦人教育会館・女性センター等の職員として、必要な知識・技術を高めるための専門的・実践的な研修を行い、施設職員としての資質向上を図る。

2. 期 日

職員コース 平成8年6月11日(火)～6月14日(金) 3泊4日

館長コース 平成8年6月11日(火)～6月12日(水) 1泊2日

3. 参加者

職員コース

115名(女性85名、男性30名)(申込数 125名)

館長コース

24名(女性20名、男性4名)(申込数 25名)

①参加施設の種類

職員コース

	婦 人 教 育 施 設			婦人教育 関連施設	合 計
	公立 1	公立 2	私 立		
96	71	23	4	3	99

館長コース

公立 1	公立 2	私 立	合 計
16	5	3	24

②年代別人数

	20代	30代	40代	50代	60代	不明	合計
女性	13	17	40	12	3	0	85
男性	0	15	9	2	4	0	30

③役職別人数

所 長	事務局長	社教主事	一般職員	合 計
2	1	5	107	115

④勤務年数

1年未満	1年～2年	2年～3年	3年～4年	4年～5年	5年以上	合 計
68	16	5	6	5	15	115
59%	14%	4%	5%	4%	13%	100%

4. プログラム

職員コース

	期 日	時 間	方 法	テ ー マ	講師（助言者・報告者）
1	6月11日(火)	14:00 ～15:30	講 議	「婦人教育施設が行う女性学教育の内容と方法」	金井 淑子 長岡短期大学教授
2	6月12日(水)	9:00 ～10:00	講 義	「婦人教育施設におけるボランティア活動の支援」	清原 桂子 前兵庫県女性センター所長 (兵庫県労働部次長)
		10:15 ～12:15	講義と 討議	「コーディネーターとしての施設職員の役割」	桜井 陽子 ㈲横浜市女性協会チーフ コーディネーター
		13:30 ～15:30	てい談	「女性のエンパワーメントと婦人教育施設の役割」	中村 紀伊 全国婦人会館協議会々長 ㈲主婦会館理事長 利谷 信義 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長 お茶の水女子大学教授 大野 曜 国立婦人教育会館長
3	6月13日(木)	11:30 ～17:00	ワークシ ョップ	A「プログラムの企画・立案」	野口 生子 安田女子大学助教授
				B「婦人教育施設におけるボランティアの育成とボランティア活動」	荒谷 信子 文部省生涯学習局社会 教育官
				C「広報の役割と方法」	池谷 まゆみ 東京アナウンス学院講師
4	6月14日(金)	9:00 ～11:30	全体会	①ワークショップの報告 ②講評と全体討議	各ワークショップの報告者 ワークショップの助言者

館長コース

	期 日	時 間	方 法	テ ー マ	講師（助言者・報告者）
1	6月11日(火)	14:00 ～15:30	講 義	「婦人教育施設が行う女性学教育の内容と方法」	金井 淑子 長岡短期大学教授
2	6月12日(水)	9:00 ～10:00	講 義	「婦人教育施設におけるボランティア活動の支援」	清原 桂子 前兵庫県女性センター所長 (兵庫県労働部次長)
		10:15 ～12:15	事例研究	「婦人教育施設における管理者の役割と運営」	西田 淑美 滋賀県立婦人センター所長 三隅 佳子 北九州市立女性センター 「ムーブ」所長
		13:30 ～15:30	てい談	「女性のエンパワーメントと婦人教育施設の役割」	中村 紀伊 全国婦人会館協議会々長 (財)主婦会館理事長 利谷 信義 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長 お茶の水女子大学教授 大野 曜 国立婦人教育会館長

5. 主なプログラムの内容

◆講 義「婦人教育施設が行う女性学教育の内容と方法」

- ・ 女性の生涯学習の新たな役割として、女性の参画のためのエンパワーメントを行使できる視点での女性学教育が必要である。
- ・ 北京行動綱領の①女性の人権②開発と女性③参画のためのエンパワーメントの3つの課題とジェンダーの視点を入れた学習を企画する。
- ・ 女性が抱える問題は、複雑多岐に渡っており、担当者が現在を生きる女性の現実を見据えることが重要である。
- ・ 女性問題の内容は、年齢層により異なるので、それぞれの女性問題の気付きに届くような別々の課題の設定が必要である。



金井 淑子氏による講義
婦人教育施設が行う女性学教育の内容と方法

- ・ 学習課題は、①性別役割分業システムの全体構造の認識②ジェンダー変動期における人間のライフステージの再構築③セクシュアリティの自律的な再構築に向けてという3つの側面を押さえる。

◆講義 「婦人教育施設におけるボランティア活動の支援」

- ・ 自分で考え、行動し、結果に責任を持つことが必要である。ボランティアは、個人をベースとする活動であることを押さえ、行政補完型の活動ではない。
- ・ 女性施設はどんな緊急な時にも、女性を支援する最後の砦とならなければならない。

◆講義と討議 「コーディネーターとしての施設職員の役割」

- ・ 施設職員は、施設のさまざまな機能を有機的に結びつける役割がある。
- ・ その地域で解決すべき女性問題がどこにあるのかを調査し、優先順位の高い課題にしぼり込みをすると共に、地域の資源をつなぐ役割を担う。
- ・ 施設職員は女性のニーズを把握し、それにあつた新しい事業企画を考え、運営の評価までする。



清原 桂子氏による講義
「婦人教育施設におけるボラセンティア活動の支援」



桜井 陽子氏による講義
「コーディネーターとしての施設職員の役割」

◆事例研究 「婦人教育施設における管理者の役割と運営」

- ・ 県民のニーズを大切に、男女共同参画社会に向けて、女性のエンパワーメントの支援、女性団体グループへの支援をしている。
- ・ 市の女性行政部や関係部局との連携、運営協議会や利用者連絡会、サポーター等と民主的関係づくりをする。
- ・ 事業は人で動く。職員の配置の適正・専門性等に配慮しつつ、職員が充分能力が発揮できる職場環境・人間関係づくりをする。

◆てい談 「女性のエンパワーメントと婦人教育施設の役割」

- ・ 施設は、人や情報が集まる場所であり、活動が励まされ、必要とする人や情報が求められる施設となるよう具体化していくことが大切である。
- ・ 女性のエンパワーメント・施設のエンパワーメントとNGOとGOの力が、その地球の女性政策の実態をなし、ビジョンづくりの基盤となる。
- ・ 職員は女性センター等で働くことにより、隠れた才能を花開させ、利用者は事業の企画・運営に携わり、問題解決を目指すことがエンパワーメントにつながり、男女共同参画が実現し暮らしやすくなる。

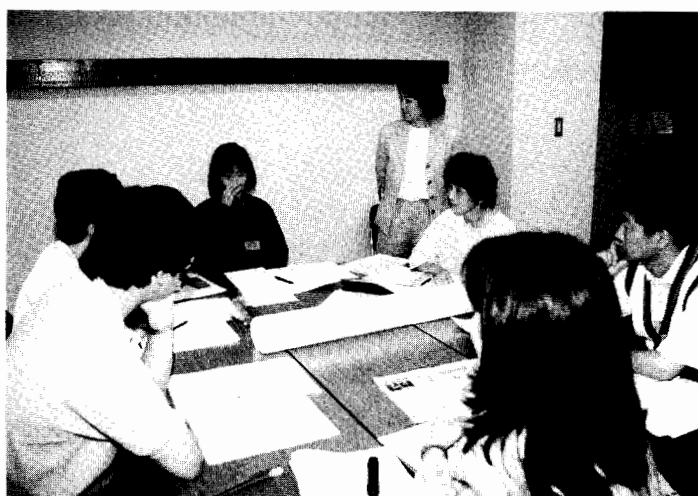


中村 紀伊氏 利谷 信義氏 大野 曜館長によるてい談
「女性のエンパワーメントと婦人教育施設の役割」

◆ワークショップ

(1)「プログラムの企画・立案」

- ・ 女性のエンパワーメントには、女性問題学習と研究の両面が必要であり、学習者にとって意味のあるプログラムの作成が必要である。
- ・ 新しいライフスタイルをつくり出すエンパワーメントのきっかけをつくる内容とする。
- ・ 多様な展開方法をどのように展開し、他の施設の資源をいかに活用するかが必要である。



「プログラムの企画・立案」のワークショップ

(2) 「婦人教育施設におけるボランティアの育成とボランティア活動」

- ボランティア活動をするには、基礎知識や技術を習得することが必要である。
- 施設は、ボランティアの活動の場を提供する。
- ボランティア活動は生涯学習と関わっており、自己開発・自己実現につながる。



「婦人教育施設におけるボランティアの育成とボランティア活動」のワークショップ

(3) 「広報の役割と方法」



「広報の役割と方法」のワークショップ

- 市民にとって必要とされている企画・立案であること、広報担当者が内容を理解し魅力を持っている人材であることが必要である。
- 宣伝と広報は異なり、広報は真実を伝えることである。
- 周囲とコミュニケーションをつくり、様々な対象者・場所へ様々な手段で広報する。

6. 今後の課題

- 社会の変化の中で施設は、市民に対してどのような役割をもっているのか、それを施設がどのように捉えているのか検討すると共に、施設の広報をすることも必要である。
- 地域の声を反映するボランティアは、施設を活性化させることができ、婦人教育施設は生涯学習推進の視点に立って、ボランティア活動の場を提供する必要がある。
- これからは、男性が女性問題を理解するだけでなく、男性自身がジェンダーに敏感になるプログラムが必要である。

(事業課専門職員 那須 光恵)

海外婦人教育情報専門家情報処理研修事業

1. 趣旨

アジア太平洋地域における女性の経済活動への参加、母子健康、福祉、教育の向上等を図るためには、これらの分野の情報やデータを整備し、必要に応じて適切な情報を提供できるシステムの充実、指導者の育成が重要な課題となる。そのため、これまで会館が行ってきた婦人教育情報システムの構築等の経験を活かし、同地域の婦人教育、女性情報等の専門家を招致し、情報処理技術の研修を通して、これら女性指導者の育成を図り、もって関係各国の母子健康、福祉、教育の向上に貢献することを目的とする。

2. 応募資格

下記の7項目の条件を満たし、なおかつ、女性問題に対する十分な理解と情報処理技術に対する強い関心を持ち、全研修に積極的に取り組む意欲のある者

- (1) 女性行政担当者、女性情報担当者。その他女性に関する業務を担当している者で所属期間の長から推薦が得られる者
- (2) 女性
- (3) 年齢35歳以下の者
- (4) 大学卒またはそれと同等の学力を有する者
- (5) 講義を理解するに十分な英語の能力を有する者
- (6) 研修の全日程に参加できる者
- (7) 心身ともに健康である者(なお、VDT作業が母体に悪影響を及ぼすという指摘があることから、妊娠中の女性の受講は望ましくない。)

3. 期間

平成8年7月25日(木)～9月4日(水) 6週間

4. 応募状況

1) 募集国

ESCAP加盟国及び準加盟国のうちODA対象国

2) 応募国

14か国 17名

5. 参加国及び参加者

6か国 6名

サジダ・カトゥン (バングラデシュ)

女性及び児童省研究員

シャーラ・アクタリー (イラン)

総理府女性局研究員及び通訳

ザーラ・ブカリ (パキスタン)

統計局労働統計係統計官

アニタ・エストレラ・バレダ (フィリピン)

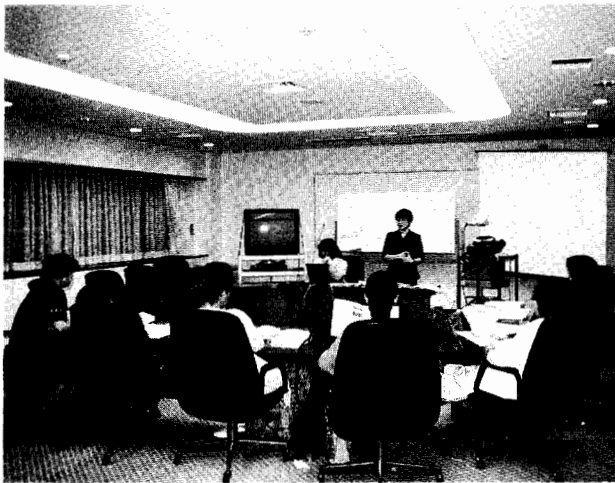
フィリピン女性の役割国内委員会統計官 II

スッティダ・ウォンサタポルンパット (タイ)

チュラロンコン大学社会科学研究所研究員及び司書

ポロツ・アカネシ・F. ファカファヌア (トンガ)

総理府女性係副秘書官



「NGOと情報活動」の講義風景



6人の研修生と大西婦人教育課長

6. プログラムの概要

(1) 講義

アジア太平洋地域の女性の地位の向上にむけて、経済、教育、保健等の面からみた課題を取り上げ、各分野における取り組み、専門家の知見等について講義を行った。また、情報処理に必要な情報科学と情報ネットワーク論の講義を行った。

- | | | |
|--------------------|--------------|--------------------------------|
| 1) 「女性行政について」 | 名取はにわ氏 | 総理府男女共同参画室長 |
| 2) 「婦人教育について」 | 大西珠枝氏 | 文部省婦人教育課長 |
| 3) 「女性と識字」 | 千葉杲弘氏 | 国際基督教大学教授 |
| 4) 「女性と意志決定」 | 青木怜子氏 | 聖心女子大学教授 |
| 5) 「情報概論」 | 山田尚勇氏 | 中京大学教授 |
| 6) 「情報ネットワーク」 | 計 宇生氏 | 学術情報センター助教授 |
| 7) 「開発と女性」 | 橋本ヒロ子氏 | 十文字学園女子大学助教授 |
| 8) 「女性と健康」 | 飯島愛子氏 | 財家族計画国際協力事業団
シニア・プログラムオフィサー |
| 9) 「女性とメディア」 | アイリーン・M.クニイ氏 | ジャーナリスト |
| 10) 「NGOと情報」 | 田口やよい氏 | フォーラムよこはま |
| 11) WINET利用、会館事業案内 | | 国立婦人教育会館職員 |

(2) 情報処理演習・ワークショップ

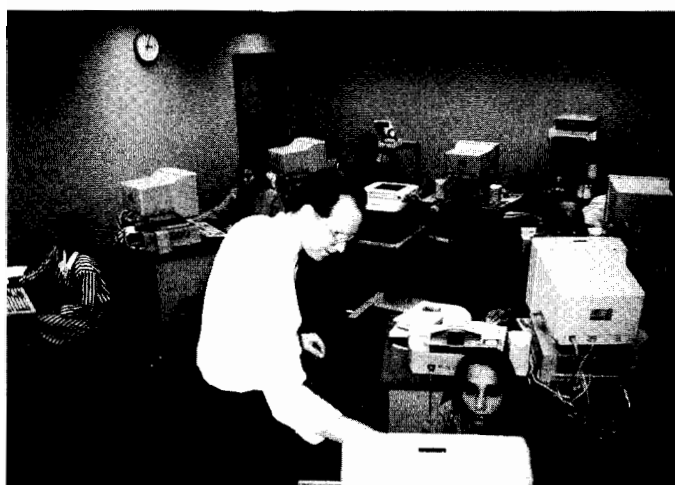
最新の機器及びソフトを使用してマルチメディアをはじめとする情報処理の技術習得を行い、さらに、その技術を応用して女性問題に関する情報の整理と分析および論文作成についての演習を行った。演習の結果は、研修生及び会館職員参加の席でプレゼンテーションを行った。

インストラクター：プライアン・リーボルト氏

ランゲージドキュメンテーションセンター講師

アシスタント：小菅誠子氏

東京大学留学生センター相談室相談員(非常勤)



リーボルト講師の情報処理演習



会館ホームページを困んで

(3) カントリーペーパーの発表と討議

研修生はこの研修参加に先立ち、自国の女性の教育、健康、社会的地位等に関する現状と課題を、統計データ等を基にしてレポートを作成した。このカントリーペーパーの発表と、それに対する参加者間の質疑応答を行った。

(4) 見学

下記機関を訪問し、情報ネットワークの基盤整備と国際協力事業について、活動調査、施設見学を行った。

- 1) 学術情報センター
- 2) 日本科学技術情報センター
- 3) 国際協力事業団国際協力総合研修所



情報処理演習の成果をプレゼンテーションに。研修の日程もあとわずか

(5) その他

講義、演習時間の合間には、ボランティアや地域小中学生との交流、会館事業への参加など、日本の生活文化の理解及びレクリエーションの為の時間を設けた。

1) ボランティアとの交流

- ア. ホームステイ (6 家庭に 1 名ずつ 1 泊)
- イ. 七夕茶会 (ゆかた着付け、七夕かざり、茶懐石、花入れ)
- ウ. 意見交換会

2) 地域との交流

- ア. 玉ノ岡中学校訪問 (夏休み中のクラブ活動見学)
- イ. 菅谷小学校の生徒及びPTAとの交歓会 (夕食会、ゲーム大会)

3) その他

平成 8 年度第 1 回公開講演会：国際シンポジウム「女性と人権」に出席

7. 今後の課題

- ・ 情報技術の環境は日進月歩の発展を続けており、毎年新たなプログラムの検討が必要である。
- ・ 情報ネットワーク確立の為のより実際的検討を行くことにより、アジア太平洋地域の女性情報ネットワーク網が年々充実していくことが期待される。

(情報交流課専門職員 油原ゆう子 佐多正子)



ゆかた姿で七夕まつり



ナイスシュートの研修生
玉の岡中学校の体育館で

プログラム

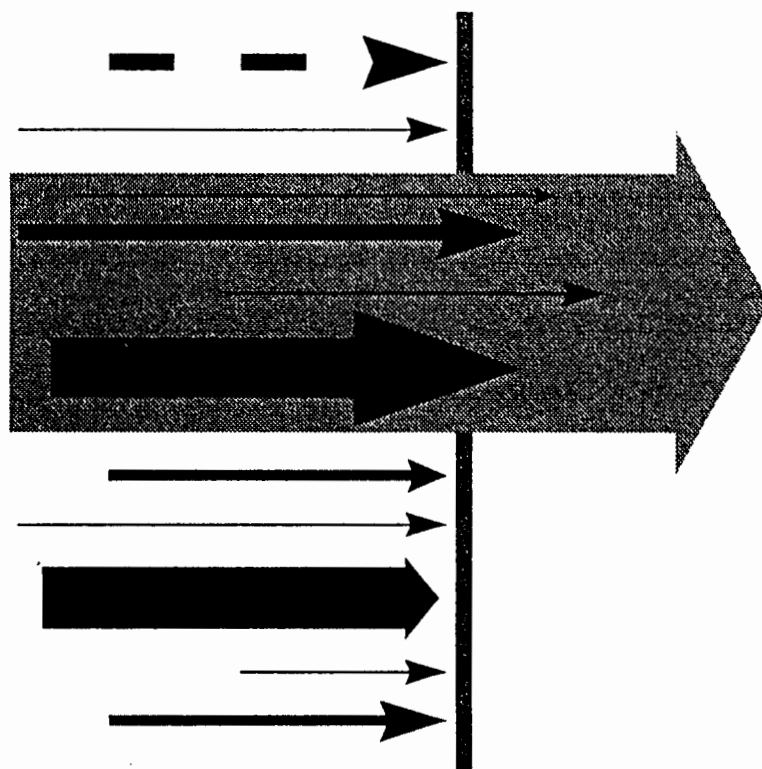
月 日(曜)	時間	テ ー マ 等	講 師 等
7月24日(水)	PM	研修生日本到着	
7月26日(金)	AM	開講式	

7月29日(月)	AM	カントリーペーパーの発表	
	PM	カントリーペーパーをめぐる討議	
7月30日(火)	PM	講義「女性行政について」 講義「婦人教育について」	名取はにわ氏 大西珠枝氏
7月31日(水)	AM	講義「女性と識字」	千葉杲弘氏
	PM	講義「女性と意志決定」	青木怜子氏
8月1日(木)	AM	講義「情報概論」	山田尚勇氏
	PM	講義「情報ネットワーク」	計 宇生氏
2日(金)	AM	講義「開発と女性」	橋本ヒロ子氏
	PM	講義「女性と健康」	飯島愛子氏
5日(月)	AM	講義「女性とメディア」	アイリーン・F.クニイ氏
	PM	講義「NGOと情報」	田口やよい氏
6日(火)		情報処理演習	ブライアン・リーボルト氏/ 小菅誠子氏
7日(水)		〃	〃
8日(木)	AM	玉ノ岡中学校訪問	
	PM	WINET/インターネット等の操作	会館情報交流課職員
9日(金)	AM	情報処理演習	リーボルト氏/小菅氏
12日(月)		情報処理演習	〃
13日(火)		〃	〃
14日(水)		〃	〃
15日(木)		〃	〃
16日(金)		〃	〃
19日(月)		ワークショップ	〃
20日(火)		〃	〃
21日(水)		〃	〃
22日(木)		〃	〃
23日(金)		〃	〃
26日(月)		プレゼンテーション	〃
27日(火)	AM	ボランティアとの意見交換	ボランティア及び会館職員
	PM	学術情報センター見学	
28日(水)	AM	日本科学技術情報センター見学	
	PM	JICA国際協力総合研修所見学	
29日(木)		見学旅行	
30日(金)		見学旅行	
9月2日(月)		研修評価会、閉講式 フェアウェルパーティー 研修生離館	
3日(火)		研修生離日	

INFORMATION PROCESSING ON WOMENS ISSUES: 1996

Participants:

Sajida Khatun	<i>Bangladesh</i>
Shahla Akhtary	<i>Iran</i>
Zahra Bukhari	<i>Pakistan</i>
Anita Estrera Baleda	<i>Philippines</i>
Sudthida Wongsathapornpat	<i>Thailand</i>
Polotu Akanesi Fakafanua	<i>Tonga</i>



第5回 フォーラム家庭教育「豊かな心を育む子育て」

◆日時：平成8年8月24日(土)

13:30～16:00

会場：国立婦人教育会館

主催：文部省、国立婦人教育会館
埼玉県教育委員会

◆参加者 472名

◆趣旨

豊かな家庭生活、健やかな子どもの成長を図るために、地域社会との連携の中で男女が共に積極的に担う子育てについて幅広い意見の交換を行う。

	男性	女性	合計
行政職員	6	17	23
学校教育関係者	2	8	10
団体・グループ	5	354	359
その他	7	44	51
不明	14	15	29
合計	34	438	472

◆プログラム

PM 1:00 開場

◇ 1:30 開会

◎司会 西田 百合子(フリー
キャスター)

◇ 1:40 第1部 基調講演

◎テーマ
「子どもたちは揺れている
—いじめ問題を考える—」

◎講師
坂本 昇一(千葉大学名誉教授
文部省いじめ対策緊急会
議主査)

◇ 2:30 第2部 フォーラム

◎テーマ
「豊かな心を育む子育て」

◎パネリスト
コーディネーター
池上 彰(NHK報道局取材
センター科学・文化部記者)
青沼 貴子(漫画家)
小西 聖子(東京医科歯科大学
難治疾患研究所被害行動
学研究部門助教授)
はしだ のりひこ(シンガー
ソングライター)

◇ 4:00 終了

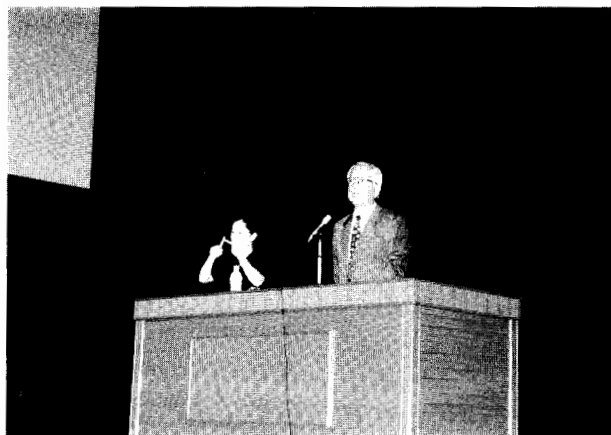


第1部 基調講演



第2部 フォーラム

◆プログラムの内容



講演中の坂本 昇一氏



コーディネーターとパネラーの各氏

第1部 基調講演「子どもたちは揺れているーいじめ問題を考えるー」

- ・ いじめは人権の問題である。「いじめられている子にも問題がある」等の発想は許しがたいものである。いじめの原因・背景については、多種多様であり一般化できない。
- ・ 今後、子どもには「思いやりの心の教育」が必要であり、失敗経験と成功経験の両面を経験させることが重要である。
- ・ いじめは、社会全体の問題ではあるが、その解決に当たっては「生きる力」を育成し、家庭における親子のふれあいの中でのしつけや基本的生活習慣の形成、豊かな情操教育が必要である。大人は、どんな社会になっても子どもの居場所は、家庭であることを忘れてはいけない。

第2部 フォーラム「豊かな心を育む子育て」

- ・ いじめの問題の解決には、子どもの価値をまず親が認めることが大切である。なぜなら、単刀直入に聞くと子どもの自尊心を傷つけることになるからである。自尊心は、人間を守る最後の価値である。
- ・ 家庭も学校も企業化しているが、家庭は楽しいオアシスでなければならない。
- ・ 子育て中の母親の孤立が多くなっており、父親はもっと家庭に目を向け、自分も家庭の中で生きていくということを自覚することが必要である。
- ・ 家庭では、性別役割分業にとらわれない役割を持ち、男女が共に担う子育てが「豊かな心を育む」ことに繋がっていくのである。

◆今後の課題

- ・ 社会がどのように変わっても、子どもの居場所は家庭であることを押さえる。
- ・ 学校・家庭・地域の三者の協力が必要であることを社会全体が認識する。

(事業課専門職員 那須 光恵)

国立婦人教育会館出前講座

～地域の婦人教育活動の充実を求めて～

1. 趣旨

国立婦人教育会館は都道府県・指定都市教育委員会等と連携して地域の婦人教育活動の充実に資するため、女性、家庭・家族の現状と課題について主催事業を通して得られた成果、情報を提供する「国立婦人教育会館出前講座」を開催する。

2. 共催地域・主題

- (1) 第1回 佐賀県教育委員会
「新しい時代、新しい家庭・地域のポリシー」
～こう変わる！これからの子育て観～
- (2) 第2回 福岡市教育委員会
「男女で創る、新時代の子育て」
～お父さんを地域でも活躍させて～
- (3) 第3回 福島県教育委員会
「ともに歩む女と男」
～“うつくしまふくしま”女と男のすてきな関係を考えよう～

3. 期日・会場

- (1) 第1回 平成8年9月6日(金)
佐賀県立女性センター・佐賀県立生涯学習センター「アバンセ」
- (2) 第2回 平成8年11月9日(土)
福岡市立婦人会館 「あいれふホール」
- (3) 第3回 平成8年11月27日(水)
福島県文化センター 小ホール

4. 参加者

- (1) 第1回 299名（女性：279 男性：20）
 - ① 参加対象：市町村の婦人・家庭教育担当者、公民館主事、社会教育主事、生涯学習リーダー、一般県民 他
 - ② 年代別内訳

	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	合計(%)
女性	20 (7)	86 (31)	67 (24)	106 (38)	279 (93)
男性	2 (10)	9 (45)	8 (40)	1 (5)	20 (7)
合計	22 (7)	95 (32)	75 (25)	107 (36)	299 (100)

③ 所属（立場）別内訳

	婦人団体 等 会 員	学 習 グ ル ー プ	行政職員	個 人	そ の 他	合 計
人 数	107	30	39	78	45	299
%	36	10	13	26	15	100

(2) 第2回 195名 (女性：171 男性：24)

① 参加対象：一般成人男女及び婦人団体のリーダー

② 年代別内訳

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	不明	合計 (%)
女性	26 (15)	18 (11)	36 (21)	24 (14)	26 (15)	41 (24)	171 (88)
男性	6 (25)	2 (8)	4 (17)	6 (25)	0 (0)	6 (25)	24 (12)
計	32 (16)	20 (10)	40 (21)	30 (15)	26 (13)	47 (25)	195 (100)

③ 所属 (立場) 別内訳

	婦人団体 等 会 員	学 習 グ ル ー プ	行政職員	個 人	P T A	その他	合 計
人 数	48	2	12	38	16	32	148
%	32	1	8	26	11	22	100

(3) 第3回 448名 (女性：431 男性：17)

① 参加対象：市町村の婦人・家庭教育担当者、公民館主事、社会教育主事、社会教育指導員、女性団体、P T A、一般県民男女

② 年代別内訳

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	不明	合計 (%)
女性	1 (1)	3 (3)	25 (21)	34 (29)	53 (45)	1 (1)	117 (97)
男性	1 (25)	0 (0)	1 (25)	0 (0)	2 (50)	0 (0)	4 (3)
計	2 (2)	3 (3)	26 (21)	34 (28)	55 (45)	1 (1)	121 (100)

③ 所属 (立場) 別内訳

	婦人団体 等 会 員	学 習 グ ル ー プ	行政職員	個 人	その他	無回答	合 計
人 数	90	4	7	13	3	4	121
%	74	3	6	11	3	3	100

5. プログラム

	第1回：佐賀県	第2回：福岡市	第3回：福島県
① 受付	9：30～10：00	12：30～13：00	9：15～10：00
② 開会	10：00～10：20	13：00～13：20	10：00～10：15
③ 情報提供	10：20～11：30	13：20～13：40	10：20～11：10
④ 地域の企画	11：30～12：00	13：40～14：00	11：10～12：00
⑤ 昼食	12：00～13：00		12：00～13：00
⑥ シンポジウム	13：00～15：30	14：10～16：30	13：00～15：25
⑦ 閉会	15：30	16：30	15：30～15：40

6. 主なプログラムの内容

第1回

(1) 情報提供

- ① 国立婦人教育会館の概要紹介
- ② 国立婦人教育会館の主催事業を通して見た家庭教育の課題

(2) 佐賀県婦人国内研修参加者からの現状報告

(3) シンポジウム

- ① テーマ「新しい時代、新しい家庭・地域のポリシー」
～こう変わる！これからの子育て観～

② 講師・提言要旨

講師 うえやまとち（漫画家）

大日向雅美（恵泉女学園大学教授）

新富 康央（佐賀大学教授）

松本侑壬子（共同通信社調査部次長）

コーディネーター 上村千賀子（国立婦人教育会館事業課長）



講師の表情

提言要旨

うえやま これまでの漫画にはなかった父親……優しく、頼りがいがあり、家事や料理が得意でいて欲しい時にすぐそばにいるようなカッコいい父親を考えて登場させたのが、漫画“クッキングパパ”の誕生であった。働く女性たちの理想を考慮して描いているのでもなく、家事をしない男性を批判するのでもない。家庭の一番良い形、それは家族が動きやすい形であればどういう形でも良いと思う。

大日向 子育てに不安を抱きストレスをためる親が急増している。少子化の中で子供に対して親や社会の期待が過剰となり、子供たちののびやかな育ちもまた阻害されている。親自身も自分の生活を充実させることが大切である。最近、イギリスでは、早く仕事を終えて家庭に戻る夫が増えている。「あなたはなぜ子育てをするのですか？」と問うと、①子供との時間が楽しいから一緒にいる環境を作りたい②妻とのパートナーシップを築きたいと答えた。日本の男性も、家庭やパートナーとの関係のありかたを考えてみてはどうか。

新富 アメリカでは、家族を大切にしなければ社会人として信用されない。いつも家族単位で動く。我々はこの学ぶ点がある。「いじめ」問題は、自尊感情の損失が原因と言われている。子供の「よさ」や「持ち味」を認めたいものである。それをサポートしなければならないのは家庭である。私は、家庭教育において「良い子づくり」でなく、「おいしい子づくり」という言葉を使っている。“損” 在感でなく、“尊” 在感の見いだせる家庭でありたい。

松本 子供は親と違うんだと痛感したことがある。それまで子供は自分の分身のように思っていた。その違いに気づき驚いたが、そのことをステキだと思った。子育ては自我が出てきた時にどういふふう子離れしていくかが大事。子育てをする父親の姿を好ましく受け入れる時代になった。「家族とは何か。最も信頼し合い支えあえる恒常的人間関係である」という定義がある。その中には、“血のつながり” とか“性別” はない。そこがこれからの家族像を考える鍵となるだろう。

第2回

(1) 情報提供

① 国立婦人教育会館の概要紹介

(2) オカリナコンサート

(3) シンポジウム

① テーマ「男女で創る、新時代の子育て」 ～お父さんを地域でも活躍させて～

② 講師・提言要旨

講師 天野 正子 (お茶の水女子大学教授)

川原 健 (株ふくや代表取締役)

墨 威宏 (共同通信社文化部記者)

山口 典子 (堺市女性団体連絡協議会事務局長)

コーディネーター 上村千賀子 (国立婦人教育会館事業課長)



講師とフロアの参加者との意見交換

提言要旨

天野 子供を育てる環境が、地域→大家族→核家族→母(単独)と変遷してきている。「子育てのハラハラ・ドキドキの楽しさと辛さを自分も味わってみたい」という男性も登場してきている。子育ては父親にとっても自己再発見につながる。核家族化し家族の人間関係がやせ細っていく社会で、地域の中でお互いに“迷惑をかけあっていく関係”も大切。子育てに関わる問題を私的なこととして片付けるのではなく、社会的な営みとして位置付ける必要がある。

山口 以前は、女性が自分らしく生きることは認められず家制度に従属するものであった。自分が家事・育児をやるべきだと女性自身も考え、縛られていた。女性も男性も「べき・らしく」ととらわれず、「できることはやれる方がやる、へたでもやったことがなくてもやってみる」と考えればお互いが楽になる。男性にも女性にも優しい男女平等をと言いたい。今夏、大阪では六千人近いO157患者が出た。行政では対応しきれなくて民間団体にも緊急の協力を求められたが、自治会の男性は実際には何もできなかった。これからの高齢社会で頼れるのは地域である。日常的に地域にかかわること、近所どうしのコミュニケーションを持つことが大切である。

墨 かつて男は仕事さえしていれば、誰にも文句をいわれない時代だった。日本社会は目に見えるものしか評価されない傾向がある。男女共同社会をめざす現在、男の生き方が問われているのも事実である。自分の家事・育児体験から子育て(家事)の大変さは身をもって理解している。核家族で両親共働きの状態では、父親が子育てに関わらなければ家庭が維持できない。育児・家事・地域活動は男女関係なく、できる人・やる気のある人が参加するだけでは不足なのだろうか。女性・男性の一方に負担を求めるのは不可解である。

川原 私は経営方針として「地域に貢献し続けることができる企業づくり」を置き、社員に対し、「網の目コミュニケーションによる自己財産づくり」を推進している。社員が行った地域貢献に応じて彼等を評価をすることにしている。定年になったら地域でしか生きられない。日頃から会社の名刺が通用しないところで活動の場を持つべきだ。

第3回

(1) 情報提供

- ① 国立婦人教育会館の概要紹介
- ② 国立婦人教育会館の主催事業を通して見た婦人教育の課題

(2) ふくしま・ふれあいトーク 女性団体の発表

(3) シンポジウム

- ① テーマ「ともに歩む^{ひと}女と男^{ひと}」
～“うつくしまふくしま”女と男のすてきな関係を考えよう～

② 講師・提言要旨

講師 二瓶由美子(桜の聖母短期大学非常勤講師)

長谷川公一(東北大学助教授)

ひこ・田中(児童文学作家)

吉岡 睦子(弁護士)

コーディネーター 上村千賀子(国立婦人教育会館事業課長)



4人の講師



磐青（磐梯青年の家）の会の発表

提言要旨

二瓶 性別役割意識の克服の必要性を考える人は多くなった。しかし、日常的には、固定的な性別役割分業から抜けられないケースが多い。課題は女性が自己実現することを支援するあたたかい社会づくりと多様な生き方を許容できる社会づくりである。

田中 家事・育児に父親が参加することは本人にも子供にとってもよいこと。男もいろいろなオプションを持っていた方がいい。男が男らしくあるために女を抑圧したり、女が女らしくあるために、男に従ったり、自分自身の実力以下の振りをしたりすることより、もっと正直に素直に、お互いが出会い接することが何よりも素敵だ。

吉岡 パートナーとの関係をもっと良いものに変えたい、自分自身の人生を生きたい、男女が仕事と家庭責任を分かち合える社会を作りたいと願う女性が着実に増えている。残念ながら男性たちはその女性たちの願いに鈍感な場合が多い。どうしたら、女性たちの声を政策決定の場に反映し、社会を変えていけるかを真剣に考え、行動する時だと思う。

長谷川 「見えるようにする」がキーワード。これまでの日本は選ばせない文化であったが、女たちは今、選ぶ自由を楽しむようになった。何のために走るのかと問われて、マラソンの有森選手は「自分自身のために走る」と答えた。「エンパワーメント」は「力をつける」「自分の力を高める」意。中国では「自強」と表現する。これは「自分自身のために生きること」を見えさせた言葉である。

(事業課専門職員 安田いく代)

女性に関する情報担当者研修会

—女性に関する情報提供業務の内容と方法—

1. 趣旨

女性に関する情報について、講義及びWINETを活用した実習等、実践的な研修を行うことによって、女性情報提供担当者の技術の向上を図る。

2. 期日

平成8年12月9日(月)～12月13日(金)

3. 参加者

下記(1)～(3)のいずれかに該当し、研修の全期間参加できる人 計30名

- (1) 公私立の婦人教育施設や婦人教育関連施設及びその他の女性の学習に関連ある施設において、情報関連業務を担当している職員等
- (2) 大学・短大等において、女性に関する情報関連業務を担当している職員
- (3) 上記以外でWINETに接続している期間において情報関連業務を担当している職員

4. 今回の参加者の概要

- (1) 参加者数：30人（女性20人 男性10人）
- (2) 地域別：北海道 3人 東北 1人 関東 5人 東京 2人
北陸 1人 中部 2人 近畿 8人 中国 2人
四国 1人 九州 3人 沖縄 2人
- (3) 機関別：婦人会館公立(1) 2人
女性関連施設 11人
生涯学習施設 3人
教育委員会 2人
首長部局女性問題担当課(室) 7人
大学・短大 1人
その他の機関・団体 4人
- (4) WINET接続機関からの参加者 17人 WINET検索経験者 6人

5. プログラムの概要

(1) 講演

「高度情報通信社会と情報担当者」(1時間50分)

学術情報センター教授 小山 照 夫 氏

「高度情報化社会」の基本となる情報技術の開発経過について、特に最近の情報ネットワーク(インターネット等)の構築について、OHPを利用しながら詳しい紹介が行われた。



小山照夫教授の講演



情報センターの研修生

(2) 講義

ア。「生涯学習情報に関する最近の状況」(1時間)

文部省生涯学習局学習情報課教育メディア調査官 坂井知志氏
文部省生涯学習局が推進している「まなびねっと」の解説と、今後の開発計画について紹介があった。

イ。「女性と情報」(2時間)

立命館大学教授 鈴木みどり氏
ジェンダーの視点からメディアをとらえ、判断すること、女性も積極的に制作者に働きかけることの必要性について講義された。最後に参考として、阪神大震災を報じたテレビニュースがビデオテープによって紹介された。

ウ。「女性に関する情報提供業務－現場の課題」(3時間)

インフォメーションプランニング代表 結城美恵子氏
情報を知識情報と目的情報に大別し、問題解決、自己啓発のためには目的意識をもって情報をとらえることが必要であるとの講義のあと、問題解決のための分析技法の実習を行った。

エ。「女性に関する法律」(2時間)

津田塾大学教授 金城清子氏
憲法、女子差別撤廃条約、母体保護法等の法解釈を行いながら、女性のエンパワーメントのために必要なリーガルリテラシーについて講義がなされた。受講生は各自六法全書を持参し、具体的に条文を読みながら講義を受けた。

(3) 事例・実務報告及び情報交流

ア. 実務紹介「情報環境の整備」(1時間)

(株)ハザン商会

松見 稔 氏

図書管理に電算システムを導入する際に必要な検討事項を挙げ、さらにパッケージソフトの紹介が行われた。

イ. 事例報告「NGOと情報」(1時間20分)

慶応義塾大学VCOM運営委員

吉村 順子 氏

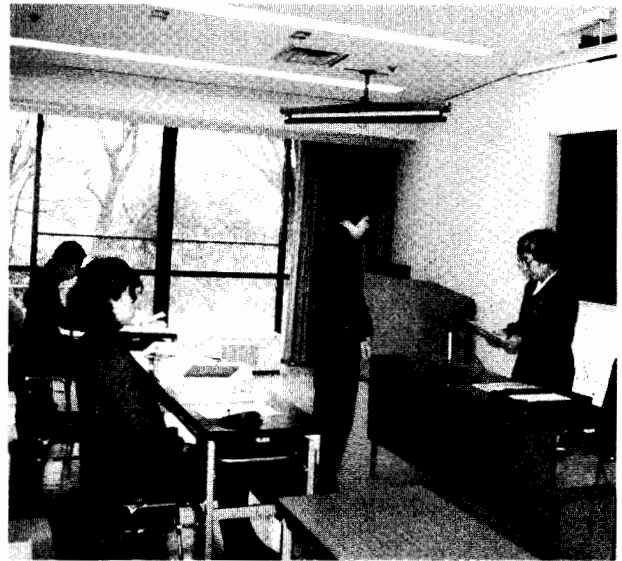
インターネット画面を表示しながら、女性・市民団体提供のホームページの紹介、さらに、情報ネットワークと社会との関わりについて報告がなされた。

ウ. 情報交流 (1時間20分)

福岡女性財団(あすばる)、愛知淑徳大学ジェンダー女性学研究所、福井県生活学習館の3機関から、それぞれの活動報告を行った後、参加者間で質疑応答や意見交換を行った。吉村順子氏も情報機器関係の助言を行った。



WINET検索の基本操作実習



大野館長より修了証書の授与

(4) WINET実習

ア. 女性情報システムの現状と課題 (50分)

情報交流課長

婦人教育情報センターの活動を中心に、女性情報の意味及び必要性について述べた。

イ. WINETの概要と基本操作説明 (1時間)

情報交流課職員

WINET-DBの概要を説明した後、接続法、検索の手順、及び主要なコマンドの説明を行った。具体的な例は、拡大投影機でスクリーンに写したパソコン画面によって表示した。

ウ. WINET-DB検索実習Ⅰ（1時間20分）

情報交流課職員

WINET-DB検索の基本的な技法を習得し、各データベースの特徴を知ることがねらいとされている。1人1台の端末機を使用。始めにキーボードの操作を練習してから、データベースごとに2題ずつ用意した実習課題の検索に取り組んだ。

エ. WINET-DB検索実習Ⅱ（3時間）

情報交流課職員

実習Ⅰで習得した検索技法を応用し、質問の分析、検索方法の選択、検索した資料の探索から回答までの、レファレンス業務一連のプロセスを学ぶ実習である。

最初にWINETの概要とコマンドの補足説明を行った後、3名ごとのグループに分かれ、実習課題に取り組んだ。本館3階コンピュータ研修室に20台の端末機、情報センターに10台の端末機を設置して、WINET検索と情報センターの資料の調査を同時に行える態勢にした。

オ. WINET-DB検索実習Ⅲ（1時間30分）

情報交流課職員

当初は、自由課題による検索や、参考図書の紹介等を予定していたが、研修生の状況を見て、WINET-DBⅡの実習を延長することにした。最後に、回答としてまとめたものをグループごとに発表した。

カ. WINET-BBS・ホームページ紹介

情報交流課職員

WINET-BBS概要説明、会館ホームページその他のインターネットの利用法の説明を行った後、WINET接続機関からの参加者は、各自の機関広報記事のBBS書き込みを行った。

6. その他

所定の課程を修了した参加者には、修了証書を交付した。

7. 今後の課題・展望等

今年度も定員を大幅に越える参加申込があったが、1人1台の端末機使用による実習を目標として、参加者を30名に抑えざるをえなかった。コンピュータ研修室、端末機等、研修設備の整備が課題である。

WINET未接続機関からの参加者が多かったことや実習課題の内容のために、実習時間が不足気味だった。参加者のニーズに合わせた柔軟なプログラム編成が今後も必要である。

参加者間の情報交流が活発に行われた。今回の参加者のみでなく、毎年の研修終了者が一緒になって、地域を核とした広いネットワーク形成がなされることが望まれる。

（情報交流課専門職員 佐多正子）

NWEC（国立婦人教育会館）アドバンストコース

1. 趣 旨

男女共同参画社会の形成に向け、婦人教育・家庭教育に関する事業の企画・立案、学校教育における男女平等教育の取組に必要な専門的知識・技術の修得及びジェンダー（社会的・文化的につくられた性差）に敏感な学習に資する実践的な研修を行う。

2. 期 日

平成8年12月16日(月)～20日(金) 4泊5日

3. 参加者

134人（女性：119人 男性：15人）

(1) 年齢層別

人 (%)

	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	合 計
女性	17(14)	18(15)	43(36)	22(19)	18(15)	1(1)	119(100)
男性	1(7)	2(13)	11(73)	—(—)	—(—)	1(7)	15(100)
合計	18(13)	20(15)	54(40)	22(16)	18(13)	2(2)	134(100)

(2) 所属別

人 (%)

	教育委員会	女性行政	婦人教育会館等施設	教員・学校関係者	団体・グループ等	合 計
女性	19(16)	21(18)	25(21)	12(10)	42(35)	119(100)
男性	6(40)	4(27)	4(27)	1(7)	—(—)	15(100)
合計	25(19)	25(19)	29(22)	13(10)	42(31)	134(100)



熱心な講義・討議が続く



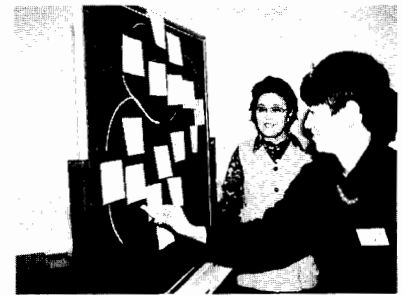
会場からも活発な意見が！

4. 主なプログラム

月日	時間	領域	方法	内容	講師等
12 月 16 日 (月)	13:30 ～ 14:30	女 性 政 策	講義	「21世紀の新たな価値の創造 —男女共同参画ビジョン」 男女共同参画審議会の答申（平成8年7 月）について、21世紀を展望した男女共同 参画社会づくりに向けた総合的ビジョンを 理解した。	藤原 房子 男女共同参画審議 会第1部会長
	14:45 ～ 15:45		講義	「男女共同参画社会の形成に向けて —婦人教育・家庭教育施策の現状と課題」 「男女共同参画2000年プラン」（平成8年 12月13日策定）により、男女共同参画社会 の形成に向けた婦人教育・家庭教育施策を 理解した。	大西 珠枝 文部省生涯学習局 婦人教育課長
	16:00 ～ 17:00		講義と グルー プ討議	「ジェンダーに敏感な学習をすすめるには」 男女共同参画社会の形成に向けジェンダ ーに敏感な学習をすすめるためにはどうす ればよいのか、国立婦人教育会館が実施し た「社会教育における女性学教育の内容と 方法に関する調査研究」をもとに考えた。	国立婦人教育会館 事業課研究員 伊藤真知子
	18:00 ～ 20:00		情報交 換	情報交換会 夕食を共にしながら、相互の自己紹介等 を行い、交流を図った。	



ワークショップも活発に！



月日	時 間	領域	方法	内 容	講 師 等
12 月 17 日 (火)	9:00 }	男女共同参画社会の形成に向けた教育・学習の今日的課題	講義と 討議	「家庭や地域の教育力の向上は父親次第!? —期待される父親たちの“地域人間”への変身」 男女共同参画社会の実現に向け、家庭・学校・地域の連携が言われる中、父親に期待される役割を考えた。	門脇 厚司 筑波大学教授
	11:15 }		体験学 習	「ミュージックセラピーワークショップ」 社会教育の学習方法の一つとして、性別役割分業等によるストレスを音によるリラクゼーション（音の体感と交流）により解消する方法を体験した。	清田眞理子 音楽療法士
	12:15		講義と 討議	「女性学教育のこれから —国立婦人教育会館“女性学講座”16年の軌跡より」 国立婦人教育会館が実施してきた「女性学講座」の歩みを踏まえ、これからの女性学教育の課題を考えた。	国立婦人教育会館 事業課長 上村千賀子
	13:15 }		講義と 討議	「男女平等教育の課題 —学校教育における取組」 男女共同参画社会の形成に向け、男女平等教育の内容、基本的な考え方を、ジェンダーの視点を基本に女性学のアプローチを用いてとらえてみた。	亀田 温子 十文字学園女子大 学助教授
	15:15		自由研究 I 参加者が設定したテーマをもとに自由に 討論し、研究を深めた。		
15:25 }					
17:25					
19:30 }					
21:00					
12 月 18 日 (水)	9:00 }	統計と 情報	講義	「女性のエンパワーメントと女性統計・情報 —国立婦人教育会館の役割」 女性の視点から統計を読むことの重要性和、国立婦人教育会館における女性情報の収集と活用等について情報を得た。	国立婦人教育会館 事業課研究員 中野 洋恵 国立婦人教育会館 情報交流課情報係 長 須永 雅子
10:00					

月日	時間	領域	方法	内容	講師等
12月18日 (水)	10:10 ～ 12:30	男女共同参画社会の形成に向けた教育・学習の内容と方法の理解	ビデオ鑑賞と講義	「映像で考える女性学」 アメリカ映画『愛と喝采の日々』(1977年制作)を見ながら、女性の生き方を女性の視点で問い直してみた。	松本侑壬子 ジャーナリスト
	13:30 ～ 16:30		紙芝居・ジェンダーチェック	ワークショップI 「知っていますか?女性の権利条約」 「女性差別撤廃条約」の内容について、ビデオ放映と紙芝居や漫才風トーク等を交えてわかりやすく解説し、さらに各自のジェンダー・バイアス度チェックを行った。	国際女性の地位協会メンバー
	<u>4つのうち1つ選択</u>		ディベート・ジェンダーチェックシート	ワークショップII 「ジェンダーチェックシートをつくろう」 無意識のうちに内在化している女性差別意識に気づくためにジェンダーバイアスチェックシートづくりやディベートにより、女性差別を見抜く視点の獲得をめざした。	グループみこし・女性問題職員研修チーム
			ランキング・プレゼンストーリーミング	ワークショップIII 「女性の自己開発学習 —『フレッシュスタート(国婦振版)』」 グループの中でよい人間関係をつくり社会的に存在するジェンダーを確かめ合い“私”に内在する女性問題に気づく学び合いを試みた。	(社)国際婦人教育振興会・自己開発研究委員会委員
			KJ法	ワークショップIV 「見直してみよう」 学校の中のジェンダー・チェック」 日常の教育活動の中で何気なく行っている児童・生徒に対する言動や、職場の人間関係の中での性別役割分業観を見直した。	河上婦志子 神奈川大学教授
	19:30 ～ 21:00		自由研究 II 参加者が設定したテーマをもとに自由に討論し、研究を深めた。		

月日	時 間	領域	方法	内 容	講 師 等
12 月 19 日 (木)	9:00 ～ 12:30 & 13:30 ～ 17:00 4つの うち1 つ選択	男女共同参画社会の形成に向けた教育・学習の課題と方策研究	講義とグループ学習	A「家庭教育に関する学習プログラムの企画・立案」 父親の家庭教育参加を促進するとともに親や地域が積極的に子育てに参画することをめざした学習プログラムを作成した。	三輪 建二 上智大学助教授 コーディネーター 国立婦人教育会館 事業課研究員 中野 洋恵
			講義とグループ学習	B「婦人教育に関する学習プログラムの企画・立案 ー女性問題解決の視点に立った学習プログラム」 男女共同参画社会の形成に向け、女性問題解決の視点に立った学習プログラムを作成した。	入江 直子 神奈川大学助教授 コーディネーター 国立婦人教育会館 事業課専門職員 小林千枝子
			講義とKJ法	C「学校教育における男女平等教育の取組」 今日の学校教育全般をジェンダー視点から見直し、ジェンダー・エクイティ実現のための教育課題とは何かを明らかにしたうえで、今後、私たちが取り組むべき方策について検討した。	朴木佳緒留 神戸大学教授 コーディネーター 国立婦人教育会館 事業課専門職員 那須 光恵
			講義とグループ討議	D「女性のエンパワーメントと団体・グループ活動」 女性のエンパワーメントをめざし、学習・情報収集を基盤にさまざまなNGO(民間団体)活動が展開される中で「実効性」を確保するため、女性の組織活動についての点検と再構築について検討した。	山口みつ子 国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会事務局長 コーディネーター 国立婦人教育会館 事業課専門職員 安田いく代

月日	時間	領域	方法	内 容	講師等
	19:30 } 21:00			自由研究 III 参加者が設定したテーマをもとに自由に 討論を行い、研究を深めた。	
12 月 20 日 (金)	9:00 } 9:50	発表と まとめ	発表	「課題・方策研究の発表」 「男女共同参画社会形成に向けた教育・ 学習の課題と方策研究」におけるワークシ ョップの概要と成果を発表した。	A、B、C、D各 ワークショップ参 加者
	10:00 } 11:30		講評・ まとめ	「講評とまとめ」 各課題と方策研究の講師による講評とま とめ。	(講師) 三輪 建二 入江 直子 朴木佳緒留 山口みつ子 (進行) 小林千枝子
	11:40 } 12:00			「NWEC(国立婦人教育会館)アドバンスト コース 修了証書」授与	

5. 今後の課題・展望等

(1) 本事業は平成7年度より実施しているものであり、今年度は特に、男女平等教育の取組における婦人教育、家庭教育、学校教育の3つの分野の教育機能の相互関連を重視し、教員等学校教育関係者を対象としたプログラムを加えた。

男女共同参画社会の形成に向け学校教育の果たす役割は大きいことから、来年度は、学校教育関係者向けに「教師のための男女平等教育セミナー」を別途開催する。



全プログラム受講者に「修了証書」を

(2) 講座の内容として、スポーツ等からだを動かすプログラム、研修半ばの半日を自由研究にあて、会館の施設見学や婦人教育情報センターの利用、会館周辺の歴史散策等、参加者がリフレッシュできるようなプログラムを導入する。

また、講座運営も、体験学習やグループによる共同作業等、多彩な学習方法を取り入れるとともに、参加者の理解が深まるよう使用教材を工夫する。

(3) 国立婦人教育会館の他の事業との連携を図り、主催事業を通しての婦人教育・家庭教育の課題等をプログラムに反映させる。

(事業課専門職員 小林千枝子)

国立婦人教育会館公開講演会

1 趣旨

女性をめぐる諸課題について、広い視野から考察する手がかりを提供することを目的として、学識経験者による講演会やシンポジウム等を開催する。

2 期日・テーマ及び参加状況

回	開催日	テ　　マ・講　　師	参加人数	関連主催事業
1	8.8.4(日)	「女性と人権」(国際シンポジウム)ー同時通訳付きー サビットリィ・クラセケラ(スリランカ)コロンボ 大学教授 サルマ・ソバーン(バングラディシュ)弁護士 吉岡 睦子 弁護士 コーディネーター 橋本 ヒロ子 十文字学園女子大学助教授	411	女性学ジェンダ ー研究フォーラ ム
2	8.11.8(金)	「水と環境」 安田 郁子 富山県立大学短期大学部教授	476	女性の国内交流 集会
3	9.2.7(水)	「私とボランティア活動」 牟田 悌三 俳優・世田谷ボランティア協会理事長	591	な し
合　　　　　計			1,478	

3 参加者(アンケート集計より) <<以下()内の数字は百分率>>

(1) 性別

回	女 性	男 性	不 明	合 計
1	375(91.2)	24(5.8)	12(3.0)	411(100)
2	319(91.1)	14(4.0)	17(4.8)	350(100)
3	420(83.8)	48(9.6)	33(6.6)	501(100)
合計	1,114(88.3)	86(6.8)	62(4.9)	1,262(100)

(2) 年代

回	20才未満	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	不 明	合 計
1	0	14(3.3)	56(13.7)	115(28.0)	122(29.7)	77(18.7)	27(6.6)	411(100)
2	0	2(0.6)	4(1.1)	86(24.6)	128(36.6)	126(36.0)	4(1.1)	350(100)
3	0	7(1.4)	12(2.4)	86(17.2)	184(36.7)	193(38.5)	19(3.8)	501(100)
合計	0	23(1.8)	72(5.7)	287(22.7)	434(34.4)	396(31.4)	50(4.0)	1,262(100)

(3) 職業

回	勤 労 者		自営業	農林漁業	主 婦	学 生	その他	不 明	合 計
	フルタイム	パートタイム							
1	130(31.7)	41(9.9)	32(7.7)	9(2.2)	156(38.1)	9(2.2)	32(7.7)	2(0.5)	411(100)
2	46(13.2)	26(7.4)	28(8.0)	6(1.7)	217(62.0)	0	16(4.6)	11(3.1)	350(100)
3	69(13.8)	40(8.0)	5(1.0)	46(9.2)	295(58.9)	0	22(4.4)	24(4.7)	501(100)
合計	245(19.4)	107(8.5)	65(5.2)	61(4.8)	668(53.0)	9(0.7)	70(5.5)	37(2.9)	1,262(100)

(4) 居住地

回	埼 玉 県	東 京 都	そ の 他	不 明	合 計
1	92(22.5)	59(14.3)	240(58.3)	20(4.9)	411(100)
2	107(9.7)	3(1.5)	226(86.2)	14(2.6)	350(100)
3	257(51.3)	6(1.2)	214(42.7)	24(4.8)	501(100)
合計	456(36.1)	68(5.4)	680(53.9)	58(4.6)	1,262(100)

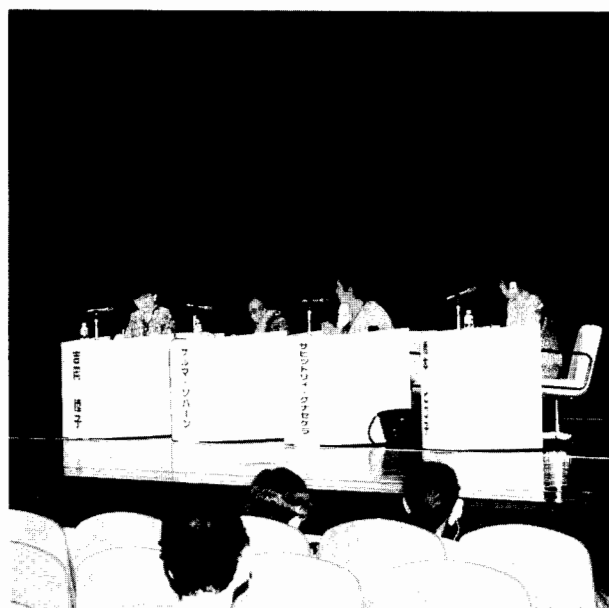
4 プログラムの内容

第1回「女性と人権」(国際シンポジウム)

(共催：「ESCAP」アジア太平洋経済社会委員会)



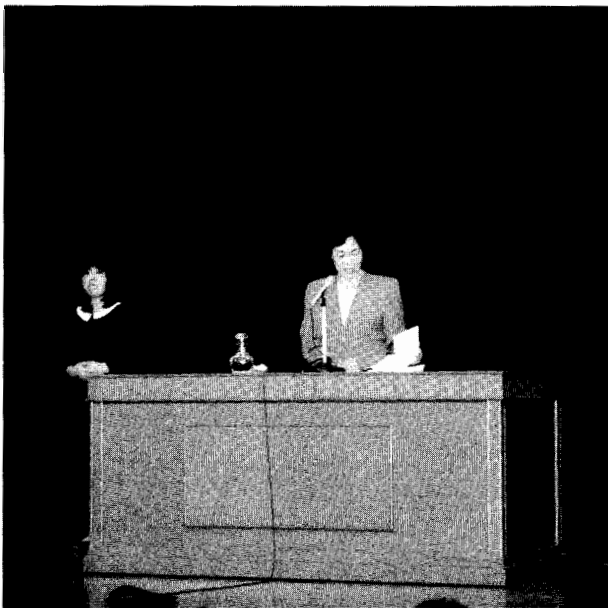
挨拶をするESCAP代表
セルマ・ケイ氏



言葉の壁を超えて……

- ・ 女性は長い間、社会の奥深いところで不利な扱いを受けてきた。
- ・ 今、女性の人権を考えることは重要なことである。
- ・ 男女平等問題をはじめ、女性の権利に対する認識はアジアでは大きな課題である。社会における女性の立場の矛盾を乗り越えなければならない。
- ・ イスラム法社会で生きる女性たちは他のアジアやアフリカの国々の社会の仕組みとの大きな違いに気が付いた。現在、女性への差別に対し、解決に向かって手をつなぎ合って戦っている。
- ・ 日本女性の現状は、夫は仕事、妻は家事・育児・介護という性別役割分業、労働の場における男女の不平等、政策決定の場への参画の遅れがあげられる。
- ・ 日本の家族法が改正されたが、再婚禁止期間が女子のみ100日、夫婦別姓選択制などの問題がある。女性関連法律には問題が山積しているのが実状である。
- ・ 日本は目覚ましい経済的発展を遂げた先進国というイメージがあったが、女性問題が存在することを知り、驚いた。
- ・ 日本では教育・健康に関する男女平等が法的には整備されているが、実生活では様々な課題が浮き彫りにされている。女性問題に関する社会的な課題はアジアの国々との共通点も多く、これからも情報交換が必要である。

第2回「水と環境」



講演中の安田 郁子氏

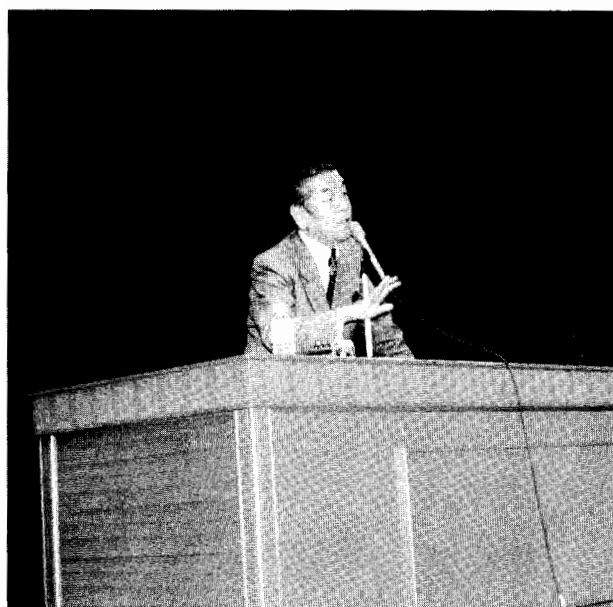
- ・ 地球環境問題は、目先の利便性のみを追求し、環境中に出る物質の行き先を考えない産業活動や暮らし方が原因である。
- ・ 酸性雨、地球温暖化、オゾンホール、海洋汚染等の問題は、地球規模での対策が必要である。そして、今後は、予防的な対策が重要であり、これ以上地球が汚染されないように食い止めることである。
- ・ 水質汚染とは、水以外のものが溶けた状態をいい、工場排水より生活排水が問題である。生活排水は、有機物を含み放っておくと腐り、イヤな匂いを出すからである。
- ・ 川の汚れは、流れと川底を含めて見なければならず、川底にいる動物の種類で汚れの度合い

が分かる。

- ・ 水環境の汚染を防ぐには、台所排水のような汚染の原因を減らし、暮らし方の工夫をすることにより、物質循環をきれいに保つことができる。
- ・ 物質循環と共存するためには、私たち一人ひとりが自分の欲望を抑え、経済循環だけを考えるのではなく、自然と妥協する道を見つけることである。

第3回「私とボランティア活動」

- ・ 現在の大人は、将来子どもたちが地域を故郷と呼べるようなことを何もしてあげていない。
- ・ 現代は、不足が不足している時代で、欲しいものは手に入っても感動がない。
- ・ ボランティアは、奉仕という考え方では長続きしない。「奉仕」の概念には「してあげる」が含まれ、相手と対等の関係になれないからである。
- ・ 「あげる」は優しさであり、「もらっちゃう」は学びの心であり、お互いが本意を出し合うことであり、この双方がボランティアに必要なことである。ボランティアは体験学習であり、自己啓発のための行動である。
- ・ 平成4年の生涯学習審議会の答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」の中で、ボランティアと生涯学習との関係について、①ボランティア活動そのものが自己開発・自己実現である②ボランティア活動を行うために必要な知識、技術を習得するための学習である③人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が図られるという①②③の視点は、自分が活動するうちに見つけたボランティア観と一致している。このボランティア活動は体験学習であるということが世間や学校にうまく伝わっていない。
- ・ 学校現場では、ボランティアは特別なことであるという認識があるが、ボランティア活動は特別なことではなく当たり前のこと、必要なことであると子どもたちに伝えて欲しい。



講演中の牟田 悌三氏

(事業課専門職員 那須 光恵・安田 育代)

女性の教育問題担当官セミナー

1. 趣旨

教育を受ける機会が男性に比べ少ない開発途上国の女性に対し、社会発展・開発の担い手となるべき人材を育成するための教育機会の充実を図る。

2. 期間

平成9年1月28日(火)～2月26日(水)

3. 共催機関

文部省、国際協力事業団（国際協力事業団からの委託事業）

4. 参加者

9か国9名（ブータン、ボリビア、フィジー、マレーシア、ミャンマー、ニカラグア、パラグアイ、ヴァヌアツ、ベトナム）

5. 内容

(1) 講義

① 文部省関連の講義（於文部省、国立教育会館）

「日本の教育制度と教育改革の現状」「文教予算について」「教職員の養成・研修」「教育課程の編成と学習指導要領」「教科書制度について」「高等教育について」「職業教育について」「専修学校教育の振興」「児童生徒の健康管理と健康教育」「成人教育について」「青少年の教育について」「教育における国際協力の推進」

② 女性の教育問題に関する講義（於国立婦人教育会館、JICA 国際協力総合研修所）

「日本の女性の現状」「教育における男女平等」「婦人教育施策の現状と課題」「女性の学習活動の歩みと婦人教育施設の役割」「女性と統計・情報」「女性政策をどうとらえるか」「固定的な性別役割分担意識是正のためのプログラム」「世界の家族と家庭教育」「社会教育における女性学教育」



熱心に講義を聴く



活発なロールプレイ

(2) 視察

① 東京都内

お茶の水女子大学、文化服装学院、日本ユネスコ協会連盟、ユネスコ・アジア文化センター

② 静岡県及び掛川市

静岡県 県立女性総合センター、県立総合教育センター

掛川市 幼稚園、小学校、中学校、高校、資生堂アートハウス、市庁舎

③ 嵐山町

小学校、中学校、町庁舎（PTAとの意見交換会を含む）

(3) 体験学習

お茶会（折り紙、花入れを含む）、家庭訪問、てまり製作

(4) カントリーレポートの発表（於JICA国際協力総合研修所）

(5) その他

① プログラムオリエンテーション

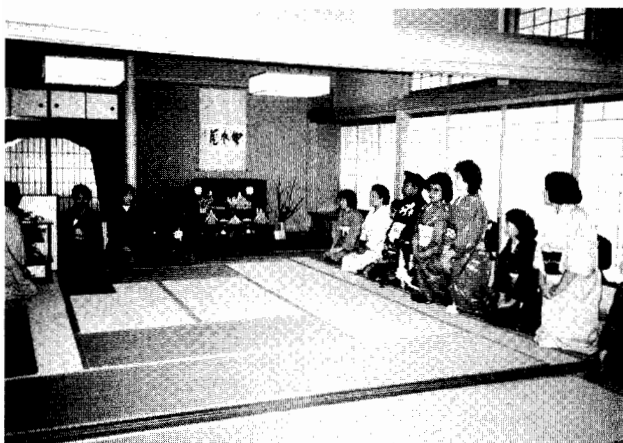
② 研修評価会



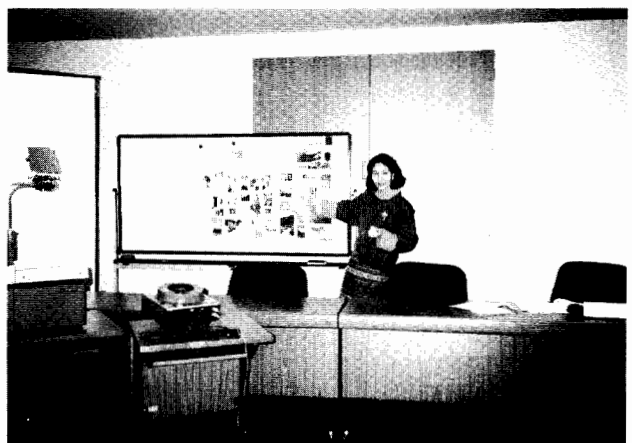
江戸時代の花嫁衣装を見る



小学校で大歓迎を受ける



着物を着てお茶会を楽しむ



カントリーレポートの発表

(情報交流課専門職員 油原ゆう子)

(事業課専門職員 小林千枝子)

女性学・ジェンダー研究フォーラム
 女性のエンパワーメントと女性学・ジェンダー研究
 — “北京” から2000年へ—

1. 趣 旨

第4回世界女性会議（北京会議）で採択された「行動綱領」の具体化に向け、女性学及びジェンダー研究と女性のエンパワーメントに関わる研究者、教育者、NGO活動者、学習者等が国立婦人教育会館に集い、団体・グループ・個人・行政が行ってきた多様な研究、教育、実践活動の課題や成果を出し合い、西暦2000年に向けた女性のエンパワーメントの推進を図るため女性学やジェンダー研究の活動や実践の成果について情報交換を行う。

なお、ここでいう「エンパワーメント」とは、“女性自身が自立しつつ、文化的、社会的、政治的、経済的状況等の変革の主体となる力を身につけること” ととらえる。

2. 期 日

平成8年8月2日(金)～4日(日)
 2泊3日

3. 参加者

809人（女性：768人 男性：41人）

*内日帰り参加者 440人

(1) 年齢層別

上段：人 下段：(%)

	20代以下	30代	40代	50代	60代以上	不 明	合 計
女 性	72 (9)	103 (13)	250 (33)	196 (26)	89 (12)	58 (8)	768 (100)
男 性	7 (17)	14 (34)	11 (27)	4 (10)	2 (5)	3 (7)	41 (100)
合 計	79 (10)	117 (14)	261 (32)	200 (25)	91 (11)	61 (8)	809 (100)

(2) 所属別

上段：人 下段：(%)

	公務員	研究者 ・教員	その他 有 職	団 体・ グ ルー プ	主 婦	学 生	その他 ・不明	合 計
女性	175 (23)	81 (11)	164 (21)	206 (27)	59 (7)	23 (3)	60 (7)	768 (100)
男性	19 (46)	4 (10)	6 (15)	7 (17)	— (—)	5 (12)	— (—)	41 (100)
合計	194 (24)	85 (11)	170 (21)	213 (26)	59 (7)	28 (3)	60 (7)	809 (100)

4. プログラム日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
第1日						開 会	パネル・ディスカ ッション「女性 のエンパワーメン トと女性学・ジェ ンダー研究」			懇親会		自由交流	
第2日		ワークショップI (参加者は関心の あるワークショップ に自由参加)		昼食			ワークショップII			夕食		自由交流	
第3日		ワークショップII		閉 会	※ 全日程を通して「情報のひろば」を開設。 参加者が資料・図書・パンフレット・チラシ・ パネル等を展示、交換、配布、販売し、女性学・ ジェンダー研究、女性のエンパワーメントに関す る情報を交換。								

5. 企画・運営委員

本フォーラムの企画・運営を会館と共同で行った。

伊藤 文子 栃木県総合教育センター生涯学習部副主幹

近江 美保 ㈱横浜市女性協会職員

亀田 温子 十文字学園女子大学助教授

内藤 和美 昭和女子大学短期大学部助教授

中下 裕子 弁護士

中山まき子 鳴門教育大学助教授

野口 生子 安田女子大学助教授

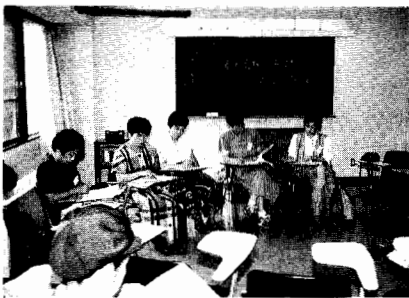
細谷 実 関東学院大学助教授

森屋 裕子 オフィス・オルタナティブ主任研究員

山田 昌弘 東京学芸大学助教授



さまざまなワークショップ



6. ワークショップ一覧

* 共同ワークショップ

No.	タイトル	実施主体
1	女性問題ってなあ〜に？	まつど女性会議
2	ミュージカル風パフォーマンス「生き方変えよう、ヴァンパイアショック」	新座はんさむウーマン
3	性差別曼陀羅 ―女性差別を体系的に読む	性差別曼陀羅研究会
4	* 見直してみよう 私のの中のジェンダーバイアス	松本真紀子
5	* 犯罪報道におけるジェンダー	井上輝子／四方由美
6	ジェンダーとアファーマティブ・アクション：欧米の場合、日本の場合	吉岡志津世
7	ジェンダーチェックシートをつくろう	グループみこし・女性問題職員研修チーム
8	成人教育とジェンダー	野口生子ほか
9	* ジェンダーによる文化と制度を語る	内藤和美／細谷 実／山田昌弘
10	アダルトイズムと女性解放	コウ・カウンセリングの会
11	ALCCスライド紙芝居 ―女性が、人が、自由にはばたくために	ALCC (アルック)
12	汽車に乗って北京世界女性会議へ ―シベリア鉄道7865kmの旅	梶本玲子
13	美しく健やかな50代 一年を重ねることは素敵	未来社会を考える分科会
14	静岡県の女性の社会参加について	磐村文乃
15	エイボン女性文化センターの目的と歩み	柳原智子
16	* ぶらすONEの実践活動報告	ぶらすONE
17	* 女性学教育	岡山女性フォーラム
18	女性の自己開発学習	(社)国際婦人教育振興会・自己開発委員会
19	世界へ向けて情報発信するために	東京女性学習グループ連絡会
20	知っていますか？ “女性の権利条約”	国際女性の地位協会
21	フェミニズム・コピー塾	F-Rise
22	シネマ女性学 ―映像に見る母娘の風景	松本侑壬子
23	女性と音楽 “女性が作るコンサート”	女性と音楽研究フォーラム
24	インターネットを使ったコミュニケーションあれこれ	ウィメンズ・オンライン・メディア
25	女性が発信するメディア ―歴史と現在・未来	ふえみんメディア・グループ
26	無報酬労働を考える	無報酬労働の数値化を進める会
27	働き方をめぐるILO条約と日本・ドイツ	<労働とジェンダー>女性院生研究会
28	シンポジウム「女性の起業 ―サポートシステムを考える」	女性と仕事研究所
29	住友メーカー3社の裁判を通して見えてきたもの	ワーキングウィメンズネットワーク (WWN)

30	女性政策の主流化、政策一般のジェンダー化、住民エンパワーメント	大沢真理
31	いけいけドンドン女性政策 こんなまちを創ろう	グループみこし・女性政策チーム
32	*自治体の女性政策と市民運動	高槻ジェンダー研究ネットワーク
33	*ディシジョン・メイキングへの女性の参画	(社)大学婦人協会岡山支部
34	市民・フェミニストのための「女性センター改造講座」PART II	東京女性行政研究会
35	北京「行動綱領」の地域での実現をめざして	船橋邦子
36	女性議員バッシングー中村幸子さん復職物語	松江女性問題研究会
37	議員のお値段	小川裕未
38	政策決定の場に、もっと女性の声を!	ジャングルNT
39	女性議員を増やすための方策と実践研究	全国フェミニスト議員連盟
40	十代の受診者五年間の分析より	河野美代子
41	セクシュアル・タブーを語る	Sexualities ～2nd B.B.～
42	開発途上国の女性の自立への協力	国際婦人年連絡会ユニフェム委員会
43	ジェンダーと開発	女性と開発国際ネットワーク
44	「開発と女性」体験ワークショップ	グループWEAVE
45	地域女性史の現在 (いま)	足立女性史研究会
46	女性の伝記を読む 嵐山町の主婦たち	グループ花
47	女性史学習14年 一会の運営もメンバーもユニーク	東海女性史研究会「知る史の会」
48	離別母子家庭の社会における地位と法制度の整備	ハンド・イン・ハンドの会
49	離婚自助グループ「しんこきゅうタイム」の取組	女性のための離婚ホットライン
50	*選択的夫婦別姓	選択的夫婦別姓に賛成する徳島県民の会
51	*「夫婦別姓」がもたらすメリットとは?	苔米地 伸
52	子ども虐待を考える	城西国際大学大学院&子ども虐待を考える会
53	いじめとジェンダー	あごら
54	淫行処罰規定と子どもの人権	渋谷区女性研究会
55	学校教育における男女平等教育の取組	男女平等教育研究会
56	都立高校におけるジェンダー教育への取組	都立高校教員有志
57	開発教育を考える ー進路の選択を拓ける教育準備	川瀬啓子
58	スピークアウト「今、考えていること、伝えたいこと」	国立婦人教育会館
59	あれも!これも!“女性問題”	練馬ジェンダー研究会
60	街なかのヌード彫刻を考えよう	のひな利子

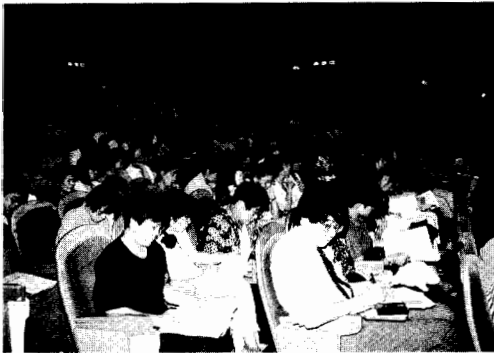
6. 主なプログラムの内容

(1) パネル・ディスカッション「女性のエンパワーメントと女性学・ジェンダー研究」

パネル・ディスカッションは、テーマを「女性のエンパワーメントと女性学・ジェンダー研究」とし、第4回世界女性会議・'95北京NGOフォーラムでの諸成果を受けて、女性のエンパワーメントのために、今後日本で、どのような理論的・実践的課題に取り組んでいくことが必要か、女性学・ジェンダー研究の問題点や活用法について検討することを試みた。

パネリスト 伊藤 公雄 大阪大学教授
井上 輝子 和光大学教授
江原由美子 東京都立大学助教授
中下 裕子 弁護士

進 行 国立婦人教育会館事業課長 上村千賀子



広い講堂も参加者で満員に

〔発言要旨〕

- ① 女性学研究者の井上先生からは、80年代の末から「**女性学のセカンドステージ**」ということが言われ、性役割という概念を軸に展開してきた女性学が、ジェンダー研究という新たな地平と連なることで、再構築の可能性と方向性が見えてきたことが指摘された。
- ② ジェンダー研究者の江原先生からは、「**ジェンダー研究へのシフトの意味**」として、90年代の女性学では、研究対象における男性の導入、研究関心の多様化、等の変化が起き、それに重なるように“女性”という語が“ジェンダー”という語に置き換えられつつあること、そして、この言葉の変化は同時に、女性学からジェンダー研究への変化をも含んでいることが、指摘された。
- ③ 法律家として実践的な活動に携わっている中下先生からは、「**女性運動のセカンドステージ**」として、抜本的に社会のシステムを問い直す時代を迎え、女性が主体的に参画し、新たな社会システムを積極的に創造していくことの必要性、さらにそのためには一人ひとりの女性のエンパワーメントが大切であること、さまざまな領域の女性たちのネットワーキングの必要性等が提言された。

- ④ 男性学研究者の伊藤先生からは、「**男性学のゆくえ**」として、ジェンダーにとらわれない社会を作ることがジェンダー研究の大きなテーマであるが、それには、徹底的にジェンダーにこだわる必要があり、長い目でみると、男性学や女性学はジェンダー研究という形で統合されていくのではないかと今後の方向性が指摘された。



(2) ワークショップ

自主企画のワークショップは、全国各地より応募を得、60件のワークショップが実施された。その背景には、女性たちが確実に力をつけてきたこともあり、日頃の研究・実践・教育の成果を発表する場、あるいはネットワークづくりをすすめる場が求められていることがあげられよう。その内容をみると、

「女性問題・ジェンダー」	16件	「女性とからだ・セクシュアリティ」	2件
「女性問題学習」	4件	「開発と女性」	3件
「女性と人権」	1件	「女性史」	3件
「女性と表現」	4件	「変容する家族・家庭」	4件
「女性とメディア」	2件	「子ども」	3件
「女性と労働」	4件	「学校教育における男女平等教育」	3件
「女性政策・女性施設」	6件	その他	1件
「政策決定の場への女性の参画」	4件		

等、「行動綱領」の12の重大問題領域が課題として取り上げられており、'95北京NGOフォーラムをきっかけに、各地で女性のエンパワーメントのアジェンダである「行動綱領」の具体化をめざし、活動が活発化している様子が見て取れる。

また、ワークショップの運営・実施方法も習熟しており、女性問題の課題に気づき解決していくための方策をわかりやすくするため、日頃の研究や教育、実践活動の成果を発表しそれにもとづき討議をするという従来の講義(報告)型のワークショップだけでなく、「グループ討議」



路上パフォーマンスも

「ディベート」「KJ法によるバズセッション」「ジェンダーチェックシートづくり等の実習」「脚本や上演まで手づくりで行う“ミュージカル”“コント”“寸劇”」「模擬ワイドショー」「ロールプレイ」「開発プロジェクトのシュミレーションゲーム」「ジェンダーイメージゲーム」「スライド」「紙芝居」「ビデオ放映や映画放映」「女性作曲家による音楽鑑賞」「パソコン通信」「写真展示やパネル展示」等、さまざまな方法が用いられバラエティーに富んでいた。

7. 今後の課題・展望等

本フォーラムは、1980年以来会館が実施してきた「女性学講座」の成果を踏まえ、その発展として、女性のエンパワーメントに向け、“研究”“実践”“教育”をつなぎ、連携していくための試みとして、多様な領域・分野及び活動の成果を持ち寄って自主企画のワークショップを開催し、交流しネットワークづくりをすすめる場として開催した。しかし、新規事業ということもあり、まだまだその趣旨が十分理解されたとはいえない。単なる研修の場ではなく、参加者自身が情報を発信・受信し、ネットワークづくりをすすめる場として位置づけていくことが必要である。

(事業課専門職員 小林千枝子)

女性の国内交流集会

「ともに語り、ともに創る－共生のためのネットワーキング－」

1. 趣 旨

女性の国内研修グループ等、女性の生涯学習を推進する団体・グループに対して、会館の機能、提供するプログラム等を主体的に活用した研修の機会、及び参加者のネットワークを広げるため全国的な交流の機会を提供する。

2. 期 日

第1回 平成8年9月25日(水)～9月27日(金)

第2回 平成8年11月6日(水)～11月8日(金)

3. 参加者

(1) 参加者数 (引率・内数)

第1回 34団体 304名 (38名)

第2回 50団体 411名 (45名)

合 計 84団体 715名 (83名)

(2) 参加者の内訳

① 都道府県別参加者数

都道府県	団体	人数	都道府県	団体	人数	都道府県	団体	人数
北海道	13	74	新潟県	1	6	鳥取県	1	8
青森県	4	12	山梨県	1	14	島根県	1	7
岩手県	2	11	長野県	4	74	岡山県	1	9
宮城県	2	29	静岡県	2	18	広島県	1	9
秋田県	—	—	富山県	1	29	山口県	2	12
山形県	—	—	石川県	3	15	徳島県	—	—
福島県	2	24	福井県	1	4	香川県	1	11
茨城県	3	44	岐阜県	1	7	愛媛県	1	7
栃木県	1	9	愛知県	4	20	高知県	—	—
群馬県	1	7	三重県	3	24	福岡県	2	19
埼玉県	1	12	滋賀県	4	35	佐賀県	4	19
千葉県	3	34	京都府	—	—	長崎県	1	7
東京都	1	3	大阪府	1	4	熊本県	2	38
神奈川県	2	12	兵庫県	1	9	大分県	1	14
			奈良県	1	5	宮崎県	—	—
			和歌山県	1	7	鹿児島県	2	13
						沖縄県	—	—

② 年代別参加者数（アンケートから：アンケート回収58.7%）

20代	7名（1.7%）
30代	15名（3.6%）
40代	135名（32.1%）
50代	151名（36.0%）
60歳以上	82名（19.5%）
不明	30名（7.1%）

③ 所属別参加者数（アンケートから）

地域婦人団体	190名（45.2%）
その他婦人団体	67名（16.0%）
婦人学級	23名（5.5%）
その他	68名（16.2%）
なし	39名（9.3%）
無記入	33名（7.8%）



私達の活動PR

4. 国立婦人教育会館提供プログラム及び参加者数

1日目・2日目

(1) プログラムA・E

プログラム	プログラムA		プログラムE	
	団体数	人数	団体数	人数
情報研修 “WINETにトライ”（パソコン実習）	7	10	10	22
テーマ別討論 日本の女性の現状	13	49	33	77
女性学教育	10	27	23	47
女と男（みんな）で担う子育て	8	19	25	49
地域活動ネットワークと団体・グループ活動	21	57	44	115
ボランティア活動	13	29	34	77
ビデオフォーラム 性別役割分業を超えて	11	38	10	31
ジェンダーと家族	12	32	12	21
会館ボランティアとの交流 野の花を活ける	4	6	14	35
七宝焼きの実習	13	47	10	25
お茶を味わう	7	12	7	14
折り紙	2	3	7	25
郷土芸能を知ろう	5	19	—	—
太極拳で健康に	7	18	2	8

(2) プログラムB—施設見学（66グループ：477名）

会館ボランティアによる施設案内と国立婦人教育会館紹介ビデオ視聴。

(3) 交歓会

参加グループが地域での活動報告や郷土芸能等を行い、相互に親睦を深めた。司会は参加者が担当した。

2日目

(4) プログラムC—情報提供 (76団体：599名)

国立婦人教育会館の概要と女性、家庭・家族の課題について会館職員が情報提供し、意見を交換した。

(5) プログラムD—草の根ネットワークワーキング (76団体：595名)

① 私達の活動PR (発表16団体：30名)

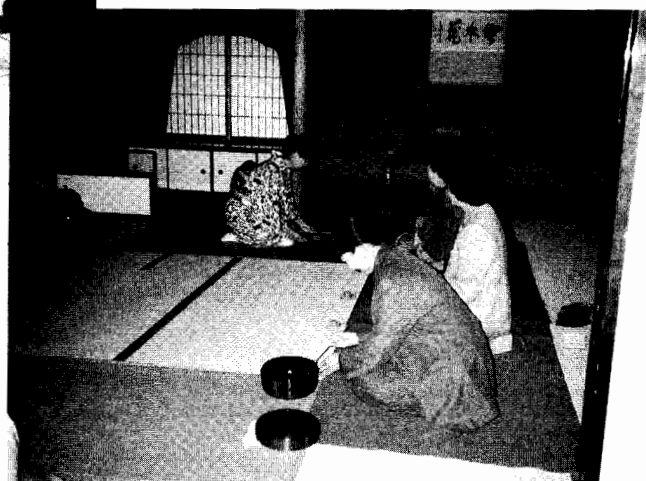
② グループ相互交流 (76団体：578名)

(6) 自由交流

参加者の積極的な呼びかけにより、自由なテーマで交流を行った。



情報研修 “WINETにトライ”



お茶を味わう

(7) 公開講演会 (第2回国内交流集会のみ実施) (229名)

題目「水と環境」

講師 安田 郁子 (富山県立大学短期大学部教授)

5. 提供プログラムの日程表

	午 前		午 後		夜 間	
第1日	入館手続・食事等		13:30 45 17:00		夕食	19:15~21:00 交歓会 (玄関ホール)
			プログラムA (情報提供、テーマ別討論、 ビデオフォーラム、 会館ボランティアとの交流会)	プログラムB (施設見学)		
			研修棟・実技棟		食堂	玄関ホール
第2日	プログラムC (情報提供)	プログラムD (草の根ネットワーク)		16:30	19:30	
		私たちの活動PR	昼食	グループ相互交流	夕食	自由交流
	講 堂	食 堂	講 堂・各研修室		食 堂	談話室
第3日	プログラムE (情報提供、テーマ別討論、 ビデオフォーラム、 会館ボランティアとの交流)		昼食	公開講演会 (第2回のみ実施)	退館・施設見学等	
	研修棟・実技棟他		食 堂	講 堂		



交 歓 会



自 由 交 流

(事業課事業係：渡邊 清美、林 正敏)

国際交流フォーラム 「女性の教育・学習とエンパワーメント」

1. 趣旨

世界各国の教育・学習における女性のエンパワーメントを目指した取り組みの現状と課題について討議を行い、かつ女性の教育分野における国際的なネットワークの形成に資する。

2. 期日

平成8年11月20日(水)～22日(金) 2泊3日

3. 参加者の概要

(1) 総数 213名

(2) 内訳

① 性別

女性 200名 男性 13名

② 国籍別

日本 183名 外国 30名 (注)



世界各国から集まった参加者たち

(注) 外国人参加者内訳

ア. 「平成8年度女性問題に関する上級担当官セミナー」参加者：19名

インドネシア、エジプト、カンボジア、ガーナ、ジャマイカ、スリランカ、タイ、
中国、ツバル、トーゴ、ドミニカ共和国、バングラデシュ、パプア・ニューギニア、
フィジー、フィリピン、ベトナム、ミクロネシア、ミャンマー

イ. 海外からの参加者：6名

イラン、カナダ、韓国、スウェーデン

ウ. 日本国内からの参加者：5名

アメリカ、スイス

4. プログラムの概要

(1) 基調講演「男女共同参画社会の実現を目指して」

講師：縫田曄子氏

男女共同参画審議会会長

総理大臣の諮問機関である総理府の男女共同参画審議会は、3年にわたって男女共同参画社会のビジョンをまとめる仕事に携わり、今年の夏に報告書を提出した。

男女共同参画社会とは、「男女が社会の対等な構成員として、自らの意志によって、社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、男女が均等に政治的、経済的、文化的利益を享受することができ、と同時に男女がその責任を負うことができる」社会である。それは、ジェンダーにしばられない、新しい価値観を持った社会であり、また、地球社会・世界平和に貢献できる社会である。



縫田曄子氏

基本的な考え方には2種類ある。1つは、日本の困難な問題を解決するために、男女共同参画社会にする必要があるというものであり、これは男性に多い考え方である。もう1つは、女性の基本的な権利を尊重するためには、男女共同参画社会でなければならないというものであり、女性に多い考え方である。審議会では、後者の立場をとった。

採るべき具体的な方策は、4つに整理できる。1つ目は慣習や制度をジェンダーの視点から見直し、政策決定の場に女性を押し出すことである。2つ目は、職場、家庭、地域における条件整備である。たとえば、保育の充実、高齢者の介護などの社会サービスを充実させる必要がある。また、男性が職場と家庭の両立が可能になるようにする必要がある。3つ目は、人権、特に女性の人権を新たな大きな課題として見直すことである。すなわち、女性に対する暴力、メディアにおける人権、リプロダクティブ・ヘルス/ライツなどの問題を教育の中心に置いていかなければならない。4つ目は、地球社会に常に目を向けていかなければならないということである。

今日本政府は、この報告書を基に、具体的な施策を検討しているが、政府、地方自治体の長、責任者が、強い意志を持って、施策を進める必要がある。また、女性のエンパワーメントが非常に大事である。たとえ今まで自分たちが持っていた権利を放棄しなければならない場合や、新たな責任を負わなければならない場合があっても、男女共同参画社会の実現を目指して進んでいくことが大切である。

(2) セッション I：識字と教育へのアクセス

「教育を受ける権利とエンパワーメントに関するケース・スタディ」

講師：カニカ・ヤムギーソン氏

前国連開発計画チーフ・テクニカル・アドバイザー〔在タイ〕

コメンテーター：田島伸二氏

開発教育協議会理事

教育およびトレーニングは、個人の成長と国の発展にとって欠くことのできない重要性を持

つ。これらは、人間の可能性を知識や能力に変え得る主要な手段であり、従って、国の将来を形成する力としての機能を果たす。

教育の根本的な改革を試みる上で鍵となるのは、地域社会と教育に対するそこでの取り組みである。地域社会の関与は不可欠である。地域社会の人々、特に結合性の強い単位としての家族（および、とりわけ女性）に、自分たちの子供の教育について大きな発言力を持つ権限が与えられなければならない。

農村地域における初等教育への参加の拡大、及び初等教育の質の向上という教育プロジェクトに中心を置くことは人々の生活の質を向上させ、地域社会に多大な恩恵をもたらすための有力な手段だと考えられている。貧しい人々や恵まれない人々にとって、堅実な初等教育ならびに社会教育活動、すなわち地域社会の学習センターは、彼らの自営への道を広げ、生産性を高める。このような教育は、人々がさらなる成長を目指して教育を続けるための確固たる基礎となるのである。



ヤムギーソーン氏

(3) セッションII：所得創出のための教育

「女性の教育、所得創出、経済のエンパワーメント」

講師：メアリー・ルー・ピロンド・キャハリアン氏

WOMEN CORE（女性のエンパワーメントのための情報連絡会）

コーディネーター〔在フィリピン〕

コメンテーター：久場嬉子氏

東京学芸大学教育学部教授

1994年の調査では、フィリピン女性の半数以上が、インフォーマル・セクターで働くことによって収入を得ているが、その生産への貢献はGNPに表れない。



キャハリン氏

ほとんど全ての学校教育制度が、機会均等の原則に基づいているにもかかわらず、現実はずう。大学卒も大学院卒も男性より女性の方が多いが、学校教育は概して性別への固定観念と男女差別を強めるものであり、職業の選択を狭め、賃金の不公平を招き、女性を生産性の低い仕事へと追いやる。教育と貧困は、お互いに切り離せないほど密接に結びついている。

学校教育に代わって女性に所得創出の機会を与えるのは学校外（ノン・フォーマル）の教育と訓練である。経済のプロジェクトのあらゆる面で男女差別に敏感になることが極めて重要である。経済のエンパワーメントの過程は、遅々

として根気を要するものである。その過程で女性は、持続可能なベースでの財源を入手して管理し、目下の生計を支え、能力を強化し、リーダーシップを築き上げる。まさに、経済のエンパワーメントなくして、21世紀における変革を目指す女性の開発のアジェンダは到達し得ないのである。

(4) セッションⅢ：女性と健康

「女性の健康—歴史と異文化交流の視点から—」

講 師：カイサ・スンドストレム氏

Q Web Sweden (女性の健康国際コミュニケーション・ネットワーク)

コーディネーター〔在スウェーデン〕

コメンテーター：飯島愛子氏

財家族計画国際協力財団研修部長／シニア・プログラム・オフィサー

今日の世界では、女性の健康は、どこに住みどの階級に属しているかによって決まる。不平等は、貧しい国と富める国の間で、また同じ国の中でも貧しい者と富める者の間でも非常に大きい。毎年60万人もの女性が妊娠・出産に関わって死亡しているが、ほとんどすべて途上国で起こっている。

どの社会でも、女性のリプロダクティブ・ヘルス／ライツは多くの要因に左右される。たとえば、人口動態の変化、人口政策、セクシュアリティと家庭生活に対する考え方、宗教・文化、避妊と中絶の規制、保健サービスの質などである。

歴史的かつ異文化交流の視点で女性のリプロダクティブ・ヘルスを学んで最も印象的なのは、女性の健康における不公平である。国家間および国内での不平等は大きいですが、同時にその差を見てみると、状況は変えられるということがわかる。



スンドストレム氏

女性は、連帯をとり歩調を合わせることによって、自分の状況を変えられる。法律を変え、保健サービスを利用し、教育や経済や仕事の機会均等を達成し、家庭や社会の質を高め、男女間の平等を現実のものとするのできるのである。

(5) セッションⅣ：少女・女子学生に対する教育

「男子に追いつき追い越すか？—1990年代のイギリスの女子教育」

講 師：ローズマリー・ディーム氏

ランカスター大学社会科学部長・教授〔在イギリス〕

コメンテーター：神田道子氏

東洋大学文学部教授

現在英国では、性別および教育に関連して、論争が起こり議論を呼んでいる。教育改革は女子教育に良い結果をもたらしたが、今や多くの学校の試験の成績で女子が男子を上回るようになって、男子に精神的なパニックを引き起こすようになった。

学校や高等教育機関における機会均等政策は、教育の場における不平等の改善を達成する上で非常に有効である。

学校運営に従事する女性は増えているが、一定のレベル以上の昇進を阻む、いわゆるガラス張りの天井が存在することは、依然として見過ごせない。しかし、性別が学校の管理運営者になる上で影響していることを男性は認めたくない。



ディーム氏

女子の成績が悪くても騒がなかったのに、男子の成績が下がってくると大騒ぎをするのはおかしい。性別のみならず、社会階級や民族性も成績に影響を及ぼしている。

学校の所在地の選択の際には、母親が重要な役割を果たしており、また、より幅広い選択をするために犠牲を払っている。

教育が雇用や市民生活や家計にどのような影響を与えるかについても考慮する必要がある。女子は学校での成績が悪ければ、成人してからの生活が成績よりも良くはならないということを問題にすべきである。

(6) 部会討議

参加者全員が「識字と教育へのアクセス」「所得創出のための教育」「女性と健康」「少女・女子学生に対する教育」の4つの部会に分かれ、多様な面から熱心に討議を行った。それぞれの部会のコーディネーターは同じタイトルを持つセッションの日本人専門家が務め、コメンテーターは外国人専門家が務めた。



活発な部会討議

(7) 部会報告

各部会のコーディネーターが、担当した部会で討議された内容について報告し、縫田曄子氏が総括した。

(8) 全体会

4つのセッションと部会の日本人専門家と外国人専門家の計8名が、参加者との間で質疑応答を行った。その際、男女共同参画社会の形成のためには教育が柱となることや、一人一人が公正な社会の実現に向けて意識を高めていく必要があることなどを確認し合った。



全体会

日 程 表

	11月20日(水)	11月21日(木)	11月22日(金)
9:00			
10:00		セッションⅢ	部会報告
11:00		セッションⅣ	全体会
12:00		昼食	閉会
13:00	受付		
14:00	開会	部会討議	
	基調講演		
15:00	セッションⅠ		
16:00	セッションⅡ		
17:00			
18:00	懇親会		
19:00		自由交流	
20:00			

(情報交流課専門職員 油原ゆう子)

開発と女性に関する文化横断的調査研究

1. 趣旨

アジア諸国の女性のおかれている状況は、政治、経済、社会、文化等によりさまざまであり、一国内においても社会階層、雇用形態、居住地域、社会構造等により、価値観やニーズが異なる。本研究では、世代、家族、文化によって異なる女性の状況に配慮したライフコース・アプローチにより、家庭、地域社会における性別役割、労働分担、教育程度等についての男女の比較、女性の開発参加を阻んでいる社会的・慣習的要因、「開発と女性」プロジェクトがもたらす女性・男性および地域への影響、社会政策等についてジェンダー分析を行うとともに、女性を男性と同等の開発の担い手としてとらえ、社会的、政治的、経済的状況の変革に主体的に関わりながら自立する力を身につける（エンパワーメント）ための具体的な戦略を構築する。

2. 実施期間

平成6年～平成10年（5年計画）

3. 研究プロジェクト・チームの構成

伊藤 るり	明治学院大学助教授	(社会学)
大沢 真理	東京大学助教授	(社会政策)
斎藤 文彦	龍谷大学専任講師	(開発経済政策)
田中由美子	国際協力事業団国際協力専門員	(開発と女性)
橋本ヒロ子	十文字学園女子大学助教授	(女性情報、女性政策)
原 ひろ子	お茶の水女子大学教授	(文化人類学、女性学)
座長 目黒 依子	上智大学教授	(社会学)
吉野 英岐	(社)農村生活総合研究センター研究員	(社会学)
上村千賀子	国立婦人教育会館事業課長	(女性学、国際関係論)
伊藤眞知子	国立婦人教育会館事業課研究員	(女性学)

4. 研究経過

(1) 平成6年度（プロジェクト会議1回開催）

「開発と女性」のテーマに関する情報収集および企画を行い、研究計画を作成した。

(2) 平成7年度（プロジェクト会議3回開催）

ジェンダー分析の枠組み構築へ向けて、プロジェクト・メンバーが分担研究を行い、報告および討議を行った。分担研究レポートのタイトルは以下の通りである。

「女性のエンパワーメントと開発援助の社会関係の再検討」	伊藤 るり
「技術への社会・ジェンダー・アプローチについて」	大沢 真理
「WID・ジェンダー配慮を浸透させるために」	斎藤 文彦
「参加型開発とジェンダー」	田中由美子
「ジェンダー分析へのライフコース的アプローチ」	目黒 依子

「農村開発と地域住民組織」	吉野 英岐
「ジェンダーと国連世界女性会議文書」 (キー概念の整理)	上村千賀子
「エンパワーメント」	原 ひろ子
「参加・開発・住民」「自営・自立」「介入」	吉野 英岐
「“EQUALITY/EQUAL” (平等) と “EQUITY/EQUITABLE” (公平) の意味」	上村千賀子
「日本の開発援助関係文書におけるWID関連の概念」	伊藤真知子

(3) 平成8年度 (プロジェクト会議7回開催)

①ジェンダー分析の枠組の検討

第2年次の研究成果をもとに、ジェンダー分析の枠組を検討した。これは女性のエンパワーメントは以下のさまざまな要因と深い関連をもつという仮設のもとに、開発プロジェクトにおける女性のエンパワーメントのプロセスをライフコース・アプローチによってとらえようとするものである。

開発プロジェクト 家族要因 住民組織 開発援助機関 政策 経済状況
文化的要因 自然環境

男女の関係性を問い変革をねらいとするジェンダー分析において、開発援助関係者や関連研究者ばかりでなく、政府レベルから地域レベルまでの政策の立案・実施における担当者等が使用可能な枠組の作成を目標としている。

②文部省科学研究費補助金 (国際学術研究) による現地調査および会議の実施

ア 現地調査 (パイロット調査) の実施

①の枠組を検証し、その精緻化を目的として、女性の状況を把握するための質問票を作成し、タイ、ネパール両国において、両国の研究分担者と協同でパイロット調査を実施した。



タイ調査



ネパール調査

(ア) タイ調査

平成8年10月6日から23日まで、バンコク、コンケンにおいて、ヒアリング調査および質問票による住民女性インタビュー調査を実施した。プロジェクト・メンバーに加えて、以下の2名が研究分担者として加わった。

ケルカー、ゴビンド

アジア工科大学助教授

スパンチャイマート、ノンラック

コンケン大学助教授

(イ) ネパール調査

平成8年11月23日から12月7日まで、カトマンズ、ポカラにおいて、ヒアリング調査および質問票による住民女性インタビュー調査を実施した。プロジェクト・メンバーに加えて、以下の1名が研究分担者として加わった。

マナングール、ラクシミ ケシャリ

トリブバン大学助教授

イ 会議の開催

平成9年1月24日～26日、国立婦人教育会館において、両国の研究分担者を招いて会議を開催し、タイ、ネパール調査報告および討議を行った。この会議の成果をもとに平成8年度科学研究費補助金（国際学術研究）実績報告書および研究成果報告書を作成し、文部省に提出する。

4. 今後の課題

平成9年度は、平成8年度パイロット調査の結果に基づき、ジェンダー分析枠組および質問票の修正を行ったうえで、タイ、ネパール両国において本調査を行う予定である。調査の実施に当たっては、前年度の経験を踏まえて、調査メンバー、調査地、調査方法等を再検討する必要がある。調査後は、両国研究分担者を招いて報告・討議のための会議の開催が予定されている。

平成10年度は、研究成果のまとめと報告書の作成を行う予定である。

(事業課研究員 伊藤真知子)



都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究

1. 趣 旨

都市化社会の進行にともなって家庭、地域が変化する中で、家庭や学校ではいじめ、不登校等様々な問題が起きている。こうした状況を踏まえ、これからの教育は「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむことが課題となり、家庭、学校、地域の連携が重視されている。そこで本研究では家庭および地域における課題を明確にし、家庭、学校、地域の連携のあり方を考える。

2. 実施期間

平成8年～平成9年（2年計画）

3. 研究プロジェクト・チームの構成

座長 天野 正子	お茶の水女子大学教授	(教育社会学)
児玉 勇二	弁護士	(法学)
清水 弘司	埼玉大学助教授	(発達心理学)
本望 雅子	新潟県教育庁生涯学習推進課社会教育主事	(社会教育)
二瓶由美子	元日本PTA全国協議会母親委員長	(PTA活動)
矢口 悦子	千葉大学非常勤講師	(地域活動)
山口千鶴子	練馬区立総合教育センター教育相談員	(学校教育)
中野 洋恵	国立婦人教育会館事業課研究員	(家庭教育)

4. 今年度の研究経過（2年計画の1年次）

(1) 懇談会の開催

- ①家庭・地域の教育機能の現状と問題点
- ②都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究に期待するもの

(2) プロジェクト会議の開催

調査方法、調査事項の検討

(3) 活動事例のヒアリング調査実施（全国15地域）

- | | |
|------------------------------------|----------------|
| ①岩手青年団体協議会 | ⑨子どもの放課後を考える会 |
| ②山形県無形文化財「日和田弥重郎花笠田植え踊り」を引き継ぐ子どもたち | ⑩高井戸イカスおやし雑学塾 |
| ③仙台子連れパパ50人委員会 | ⑪練馬区青少年育成地区委員会 |
| ④石打子どもと地域を考える会 | ⑫岡山自然を守る会 |
| ⑤子ども鬼太鼓 | ⑬四国ブロック女性集会 |
| ⑥千葉市立打瀬小学校 | ⑭浦添市内間青年会 |
| ⑦すぎのこ親父の会 | ⑮宮城県白石第二小学校 |
| ⑧世田谷プレイパーク連絡協議会、憩いの家他 | (事業課研究員 中野洋恵) |

社会教育における女性学教育の内容と方法に関する調査研究

1. 趣旨

女性学に関する研究・教育・実践活動の成果を収集・分析・整理し、社会教育における女性学教育の内容・方法を構築し、各種女性学講座の充実に資する。

2. 実施期間

平成5年～平成8年（4年計画）

3. 研究プロジェクト・チームの構成

伊藤 公雄 大阪大学教授
座長 井上 輝子 和光大学教授
金井 淑子 長岡短期大学教授
加野 芳正 香川大学教授
國信 潤子 愛知淑徳大学教授
塩田 咲子 高崎経済大学教授
直井 道子 東京学芸大学教授
荒谷 信子 文部省生涯学習局社会教育官
上村千賀子 国立婦人教育会館事業課長
伊藤眞知子 国立婦人教育会館事業課研究員
中野 洋恵 国立婦人教育会館事業課研究員

4. 今年度の研究経過

(1) 平成5年度

調査研究プロジェクトに向けた情報収集のための懇談会を「社会教育における女性学教育の内容と方法」をテーマとして開催した。

①懇談会 I

出席者：女性学に関する事業を行っている婦人教育施設等の職員11名

②懇談会 II

出席者：大学関係者等11名

(2) 平成6年度（プロジェクト会議4回開催）

①調査研究の企画

②ヒアリングによる事例研究

プロジェクト会議において、女性学講座等を実施している女性センター等の担当者による事例報告を受け、討議を行った。

③女性学のコアとなる内容についての研究討議

ワーキング・グループにおいて「女性学のコアとなる内容（案）」を作成し、プロジェクト会議において、研究討議を行った。

(3) 平成7年度（プロジェクト会議5回開催）

①女性学のコアとなる内容および具体的内容についての研究討議

②ヒアリングによる女性学の方法についての事例研究

プロジェクト会議において、新しい方法としてのメディア・リテラシー、コンシャスネス・レイジング、コラージュ、ロールプレイの専門家による事例報告および体験学習を実施し、討議を行った。

(4) 平成8年度（プロジェクト会議2回開催）

①社会教育における女性学教育の方法についての検討

プロジェクト会議において、女性学の方法の基本的な考え方について研究討議を行った。

②一般向け『女性学教育／学習ハンドブック』の原稿の分担執筆および検討

プロジェクト・メンバーが分担執筆し、プロジェクト会議において検討した。

『女性学教育／学習ハンドブック』目次案

PART1 社会教育における女性学教育の内容

I 性別役割分業の見直し

1 女性差別撤廃条約と性別役割分業の打破

6 家事労働の経済評価

2 性別役割分業の歴史

7 地域活動の脱・性別役割分業化

3 性別役割分業の現状と課題

8 参画のためのエンパワーメント

4 労働市場におけるジェンダー・ギャップ

9 メディアの性役割表現

5 性別役割分業を支える税、社会保障の見直し

10 性別役割分業と南北問題

II 多様な家族・ライフスタイルへ

1 近代家族の特質

6 恋愛・結婚・離婚の政治学

2 戦後家族と「家」意識の残存

7 母性の政治学

3 多様な家族の可能性

8 共働き・片働きの生活

4 幼児期におけるジェンダー形成

9 育児と老後の谷間

5 学校文化とジェンダー

10 老後問題とジェンダー

III セクシュアリティ

1 セクシュアリティの近代神話

5 性と暴力

2 生殖の政治学

6 売買春問題

3 美の政治学

7 ポルノグラフィー

4 日常性の中のジェンダーとセクシュアリティ

8 多様なセクシュアリティ

PART2 社会教育における女性学教育の方法

PART3 バージョン別プログラム例

5. 今後の課題

研究プロジェクトは、今年度で終了したが、報告書の印刷・配布およびハンドブックの出版については、平成9年度に実施する。

(事業課研究員 伊藤真知子)

女性及び家族に関する統計の調査研究

平成4～8年度

1. 趣旨

女性及び家族の実態を的確に把握する上で、統計データは必要不可欠な基礎資料であるが、必要なデータが各種の統計資料に分散されていること、統計の種類によっては男女別のデータが公表されていないこと等、いくつかの問題点が指摘されている。さらに、国内行動計画や国連による各国への働きかけから統計データの整備が緊急の課題となっている。

こうした動きを受け、女性及び家族に関する統計データベースの在り方を検討し、統計システムの開発を行うことによって、女性の地位向上及び男女平等の推進に資する事を目的として、調査研究を行う。

2. 懇談会の設置

統計、コンピュータ及び女性問題の専門家からなる懇談会を設け、女性及び家族に関する統計データベース及びその提供システムの在り方について検討する。

懇談会委員

飯田記子	学術情報センター助教授	(平成4～5年度)
座長 伊藤陽一	法政大学経済学部教授	(平成4～8年度)
岩崎俊夫	立教大学経済学部教授	(平成5～8年度)
城戸喜子	聖学院大学政治経済学部教授	(平成6年度)
〃	慶應義塾大学商学部教授	(平成7～8年度)
久場嬉子	東京学芸大学教育学部教授	(平成5～8年度)
篠塚英子	お茶の水女子大学家政学部助教授	(平成4年度)
〃	お茶の水女子大学生生活科学部助教授	(平成5年度)
〃	お茶の水女子大学生生活科学部教授	(平成6～8年度)
杉山明子	東京女子大学現代文化学部教授	(平成4～8年度)
田中尚美	東洋大学非常勤講師	(平成5～8年度)
谷口佳子	青森公立大学教授	(平成5～8年度)
*杉橋やよい	法政大学大学院	(平成8年度)

(データ作成、チェック作業)

3. データベース構築

女性の状況を明らかにする「女性統計」だけでなく、そのもとになる主要な統計を「基本統計」としてとりあげる予定であったが、「基本統計」については、ホームページで提供される方向にあること、磁気テープがかなり高額であること、格納に必要な作業が複雑で膨大であること等から公開を見送ることとした。

「女性統計」について懇談会で検討し、12分野を委員が分担して、既存の統計からデータ収集を行い、ワークシートを作成した。最新年次の全国表を作成したが、分野によって詳細度がまちまちとなった。専門家の利用に耐え得ると同時に、非専門家向けのものも含めるということから、

詳細表中心の分野についても、簡略表の作成を依頼することとなった。このワークシートに基づき、データを作成して格納作業を行った。

最終的には、表示画面の制約、操作性等を考慮して、公開するデータは簡略表のみとなった。

「女性統計」の分野を以下に示す。

- | | |
|---------------|----------------------|
| I. 人口構成と変化 | V. 教育・学習 |
| II. 世帯・家族・婚姻等 | VI. 住居・居住環境 |
| III. 労働 | VII. 健康・医療 |
| (1)就労・労働力状態 | VIII. 社会保障・福祉 |
| (2)労働条件 | IX. 安全・犯罪・司法 |
| (3)無償労働 | X. 意思決定への参画と社会的活動 |
| IV. 消費と生活 | XI. スポーツとレクリエーション・文化 |
| (1)家計収支・貯蓄等 | |
| (2)生活時間 | XII. 意識調査 |

4. 統計システム

統計情報データベースは、12月に「労働」「意識調査」を除いた分野について試験公開し、3月中には、全分野公開する予定である。既存のWINETでの公開であるため、公衆電話回線を通じた利用を前提としている。

5. 今後の課題

今回公開した統計表は、作業時点での最新年次の全国表であるが、国際比較表、都道府県表については未検討の部分があり、データ更新とあわせて今後の維持管理体制を整備していかなければならない。

女性統計（全件） 全国

* キー種別を入力して下さい *

- | | | | |
|---|----------|---|-------|
| 1 | レコード一連番号 | 2 | キーワード |
| 3 | 省庁区分コード | 4 | 出典コード |

キー種別入力 ==>2

女性統計（全件） 全国 キーワード

* キーワードを入力して下さい。 *

- 例)
- | | | | |
|-----------|-----|-------|-----------|
| 人口 | --> | 人口 | |
| 人口 AND 高齢 | --> | 人口,高齢 | または 人口 高齢 |
| 人口 OR 高齢 | --> | 人口;高齢 | |

項目入力 ==>家事

女性統計（全件） 全国 キーワード 家事

ヒット件数は 7件です。

- 1 性(妻・夫)、有業・無業、家族類型別仕事と家事時間(1991) (社会生活基本調査)
- 2 性、年齢階級(5歳区分)別家事関連時間の推移(1976、1981、1986、1991) (社会生活基本調査)
- 3 性、年齢階級別有配偶者の家事関連時間(1986、1991) (社会生活基本調査)
- 4 性別成人の家事・社会生活行動及び自由時間(1990) (国民生活時間調査)
- 5 性、年齢階級別日常生活への影響の有無割合(1992) (国民生活基礎調査)
- 6 母子・父子世帯、家事種類別担当者の分布比率(1988) (全国母子世帯等調査)
- 7 法律に基づいて配置されている女性の委員及び相談員の数(1993) (労働省データ)

* 表示したい表名の項番を入力して下さい。 *

年次を指定する時は"N"を入力
次の一覧を表示する時には空送信

項番入力 ==>1

女性統計(全件) 全国 キ-ワ-ト 家事
 112080 性(妻・夫)、有業・無業、家族類型別仕事と家事時間(1991) (社会生活基本調査)
 総数：妻：全国計：1991：単位：時間、分

家族類型	計	通勤・通学	仕事	家事	介護・看護	育児
総数	9.04	0.18	3.23	4.03	0.06	0.35
共働き	10.23	0.30	5.48	3.16	0.04	0.15
共に雇用者	10.37	0.43	6.03	3.05	0.03	0.14
妻35h未満	9.50	0.37	4.26	3.55	0.04	0.13
妻35h以上	11.06	0.48	7.04	2.34	0.03	0.14
夫有業妻無業	7.38	0.00	0.05	5.21	0.06	1.15
夫無業妻有業	9.51	0.36	5.54	2.38	0.09	0.03
夫無業妻無業	5.21	0.00	0.04	4.10	0.14	0.04

続きデータを表示する場合は空送信，前画面のデータ表示する場合は'B'，
 注記表示は'H1'，項目名詳細は'H2'，出典一覧は'H3'を入力してください。
 これで終了する場合は'E'を入力して下さい。

注記参照画面
 112080 性(妻・夫)、有業・無業、家族類型別仕事と家事時間(1991) (社会生活基本調査)
 注記
 ありません

送信キーで統計表示画面へ戻ります

項目名詳細参照画面
 112080 性(妻・夫)、有業・無業、家族類型別仕事と家事時間(1991) (社会生活基本調査)
 項目名(簡略) --->項目名(詳細)

総数 ---> 総数
 妻 ---> 妻
 全国計 ---> 全国計
 1991 ---> 1991
 単位：時間、分 ---> 単位：時間、分
 家族類型 ---> 家族類型
 計 ---> 計
 通勤・通学 ---> 通勤・通学
 仕事 ---> 仕事
 家事 ---> 家事
 介護・看護 ---> 介護・看護
 育児 ---> 育児
 総数 ---> 総数

送信キーで統計表示画面へ戻ります

調査名・出典参照画面

112080 性(妻・夫)、有業・無業、家族類型別仕事と家事時間(1991) (社会生活基本調査)

調査名及び出典

社会生活基本調査

出典:社会生活基本調査報告(1991)第1巻第7表

送信キーで統計表示画面へ戻ります

女性統計(全件) 全国 キーワード 家事

112080 性(妻・夫)、有業・無業、家族類型別仕事と家事時間(1991) (社会生活基本調査)

総数: 妻: 全国計: 1991: 単位: 時間、分

家族類型	計	通勤・通学	仕事	家事	介護・看護	育児
総数	9.04	0.18	3.23	4.03	0.06	0.35
共働き	10.23	0.30	5.48	3.16	0.04	0.15
共に雇用者	10.37	0.43	6.03	3.05	0.03	0.14
妻35h未満	9.50	0.37	4.26	3.55	0.04	0.13
妻35h以上	11.06	0.48	7.04	2.34	0.03	0.14
夫有業妻無業	7.38	0.00	0.05	5.21	0.06	1.15
夫無業妻有業	9.51	0.36	5.54	2.38	0.09	0.03
夫無業妻無業	5.21	0.00	0.04	4.10	0.14	0.04

続きデータを表示する場合は空送信, 前画面のデータ表示する場合は'B',
注記表示は'H1', 項目名詳細は'H2', 出典一覧は'H3'を入力してください。
これで終了する場合は'E'を入力して下さい。

空: 表再表示 1: 表名一覧画面へ 2: キー種別選択画面へ
3: 地域名入力画面へ 4: 初期画面へ
項番入力 ==>

(情報交流課情報係長 須永雅子)

マルチメディア利用の対話型遠隔講座 「父親の子育て・自分探し」

1. 趣旨

文部省委嘱の「新教育メディア研究開発事業」の一環として開催した。この事業は、生涯学習時代を迎え、新しい情報通信技術を利用することによって、時間的・空間的制約を超えた新しい学習形態の可能性について調査研究を行うものである。今年度は下記の趣旨に沿ったテーマを設定した。

「豊かな家庭生活、健やかな子どもの成長を図るために、父親が家庭や地域社会の活動に積極的に参加することが求められている。『父親』について、地域を越えた幅広い意見の交換を行うため、通信系マルチメディアを活用した遠隔講座を開催する。」

2. 主催

新潟県教育委員会、千葉県教育委員会、国立婦人教育会館

3. 日時

第1回 11月16日(土) 13:30～16:00

第2回 11月30日(土) 13:30～16:00

第3回 12月7日(土) 13:30～16:00

4. 会場

新潟県立生涯学習推進センター

さわやかちば県民プラザ

国立婦人教育会館

5. 参加者

原則として各会場30名

主として小学生程度の子どものもつ父親、3回連続して参加できる人

6. プログラム概要

3回連続の講座を、大きく、[問題提起]、[展開]、[まとめ]の流れとし、各回にもそれぞれテーマを設けた。講義、事例報告等では、マルチメディアデータベースの検索画面、VTR、書画カメラ等を用いて、具体的な説明を行うようにした。また、レスポンスアナライザーを使用し、会場の参加者の意見を即座に集計して、モニター画面に表示する手法も採用した。

以下にプログラムの内容を紹介する。

遠隔講座プログラム

回	開催日	テ　　マ	講師・コーディネーター
1回	平成8年11月16日 13:30~16:00	「父親するってどんなこと」 コーディネーターによる課題提起 講義	清水 弘司 埼玉大学助教授 間藤 侑 新潟青陵女子短期大学教授
2回	平成8年11月30日 13:30~16:00	「こんなお父さん、あんなお父さん」 コーディネーターによる課題提起 講義 事例報告 埼玉 スポーツ少年団指導員 千葉 おやじの会 新潟 父親学級参加の会「F94」	上村千賀子 国立婦人教育会館事業課長 重川 治樹 毎日新聞社編集制作総センター編集委員
3回	平成8年12月7日 13:30~16:00	「これからのお父さん」 講義 コーディネーターによる課題提起	渡邊 秀樹 慶應義塾大学教授 佐藤 洋子 ジャーナリスト

主なプログラムの内容

◆ 第1回 父親するってどんなこと

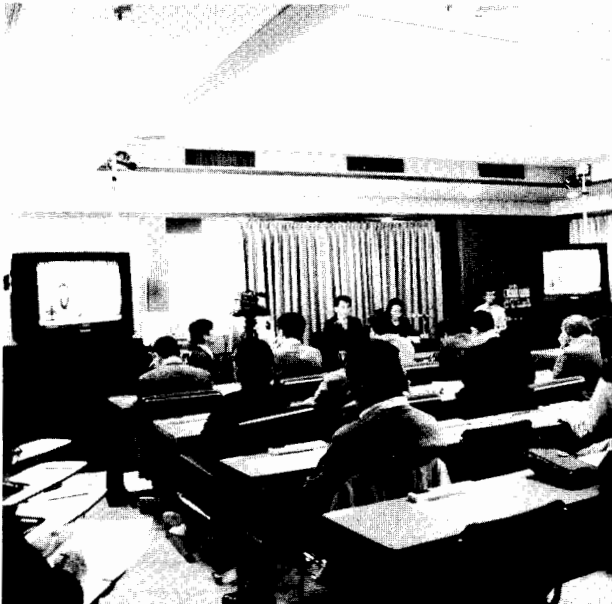
- ・ 国際比較調査によると日本の父親は子どもと一緒に過ごす時間が短く、食事の世話やしつけをしていない、日本の父親の役割は「生活費を稼ぐこと」であるという結果がでている。社会や家族の状況が変わったために子どもが“父親を体験する”ことが難しくなっている。家庭の中で父親の役割が喪失し、父親が仕事をしている姿を見ることが少なくなったことが父親不在として問題となっている。
- ・ 1人の人間の中には「包む（受容する）原理」（母性原理）と「切る原理」（父性原理）がある。従来の固定的な父親、母親という役割をこえ、主体性を持って柔軟に子どもと向き合うことが大切である。
- ・ 父親のあり方に正解、マニュアルなどない。様々なタイプの父親がいて異なるものが共存する社会が望まれる。

◆ 第2回 こんなお父さん、あんなお父さん

- ・ 男社会の中では父子家庭の父親はダメ男のレッテルを貼られ、会社の中でも子どもの学校でも地域でも居場所がない。しかし、政治、経済、男女関係、親子関係が変化の中で既製のシステムが揺らぎはじめ、男性も変わらなければならなくなってきた。
- ・ 家事、育児という“手仕事”をすることによって男も本当に自立し、生きている実感を持てるようになる。男性が女性を「家事、子産み子育ての機械」として見ていることが、男女の関係を歪めている。
- ・ 父親が地域活動に参加することによって父親自身が楽しさを感じる事が重要である。無理するのではなく、できるところから始めていけばいいのではないか。しかし、父親の参加する地域活動はカップル至上主義になりがちなのでシングルペアレントの視点も必要である。

◆ 第3回 これからのお父さん

- ・ 子育てが母親に独占されていると、子どもは子どものニーズを把握している母親の方を向かざるを得なくなるという問題が生じる。父親が子育てに関わることによって、子どもは多様な価値や見方があることを理解する。大勢の人が子どもに関わっていくこと、マルチペアレンティングが重要である。
- ・ 男性は「父親する」ことによって、仕事、家庭、趣味にアイデンティティを持てるようになる。イベント型育児ではなく、日常的に子育てに参加することが必要である。
- ・ 性別役割分業観は根深く刷り込まれているので変えていくのは難しい。しかし、これからの世の中は少子化、高齢化社会の中で不足する労働力を補うためにも共働きは増加するので、男女にとって家庭と仕事の両立が課題となる。



遠隔講座 第2回会場（研修棟中会議室）



第3回 リハーサル中の渡邊講師

7. マルチメディアデータベース

講義、事例報告における説明のプレゼンテーションには、会館作成のマルチメディアデータベース（「家庭教育データベース」）の検索データを使用した。

昨年度の「フォーラム家庭教育」に関連して作成されたデータに加え、今年度は、家族関係の統計・調査、家庭教育関係の国・地方自治体の施策、父親の地域活動報告、父親と子どもに関する文献リスト（当会館所蔵分）その他を入力した。

データベースの作成にあたっては、今年度は、Lotus-Notes Dominoを試験的に採用し、HTMLのタグづけを自動化した、簡便なデータ作成・管理・検索のシステム構成にした。下の図は、データベースのメニュー画面とデータ内容の例である。

国立婦人教育会館
家庭教育データベース

資料別

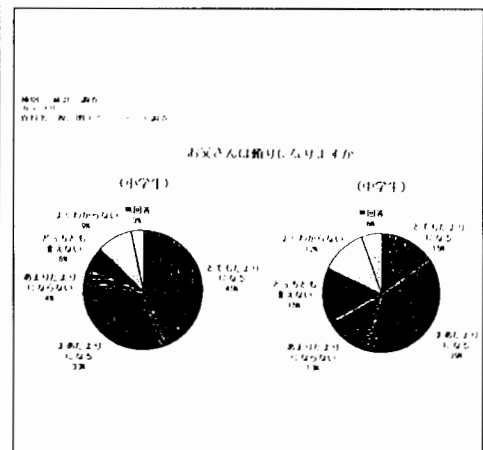
統計・調査	数字でみれば - 統計や比較調査のデータを集めました。 国・地方自治体は家庭教育について どう考えているのでしょうか。
施策	地域参加のいろいろ -
事例・各地の活動	講座やサークルの活動を紹介します。
情報QX	いろいろな情報を集めてみました。
文献・ビデオ	会館所蔵の関連資料のリストです。
コミュニケーションひろば	

内容別

家庭
家族
父親
母親
子ども
育児・子育て
いじめから
学校
地域社会
学習
行政
文化・メディア

webmaster@nivec.go.jp
ページが表示されました。

マルチメディアデータベース
「家庭教育データベース」のメニュー画面



間藤講師のアンケート調査結果
(新潟県の小中学生の父親観)

8. システム概要

講座に用いた機器構成は、デジタル公衆回線 (INS)、テレビ会議システム、インターネットによるデータベース検索機器、レスポンスアナライザーの質問及び回答集計システム、モニターテレビ、カメラ、その他である。第3回時の概念図を例示する (P.71) が、通信回線スピード、接続形態、モニター構成を各回毎に変化させることにより、運用上の比較を行った。

9. 今後の課題・展望

3年計画の第2年次にあたる今回は、一般的な社会教育施設の学級規模を想定した遠隔講座を実施した。マルチメディアと遠隔講座を結合させた学習形態として画期的なものであったが、3会場の参加者が一体感、臨場感をもてるよう、さらにプログラムの内容、機器構成等の検討が必要である。

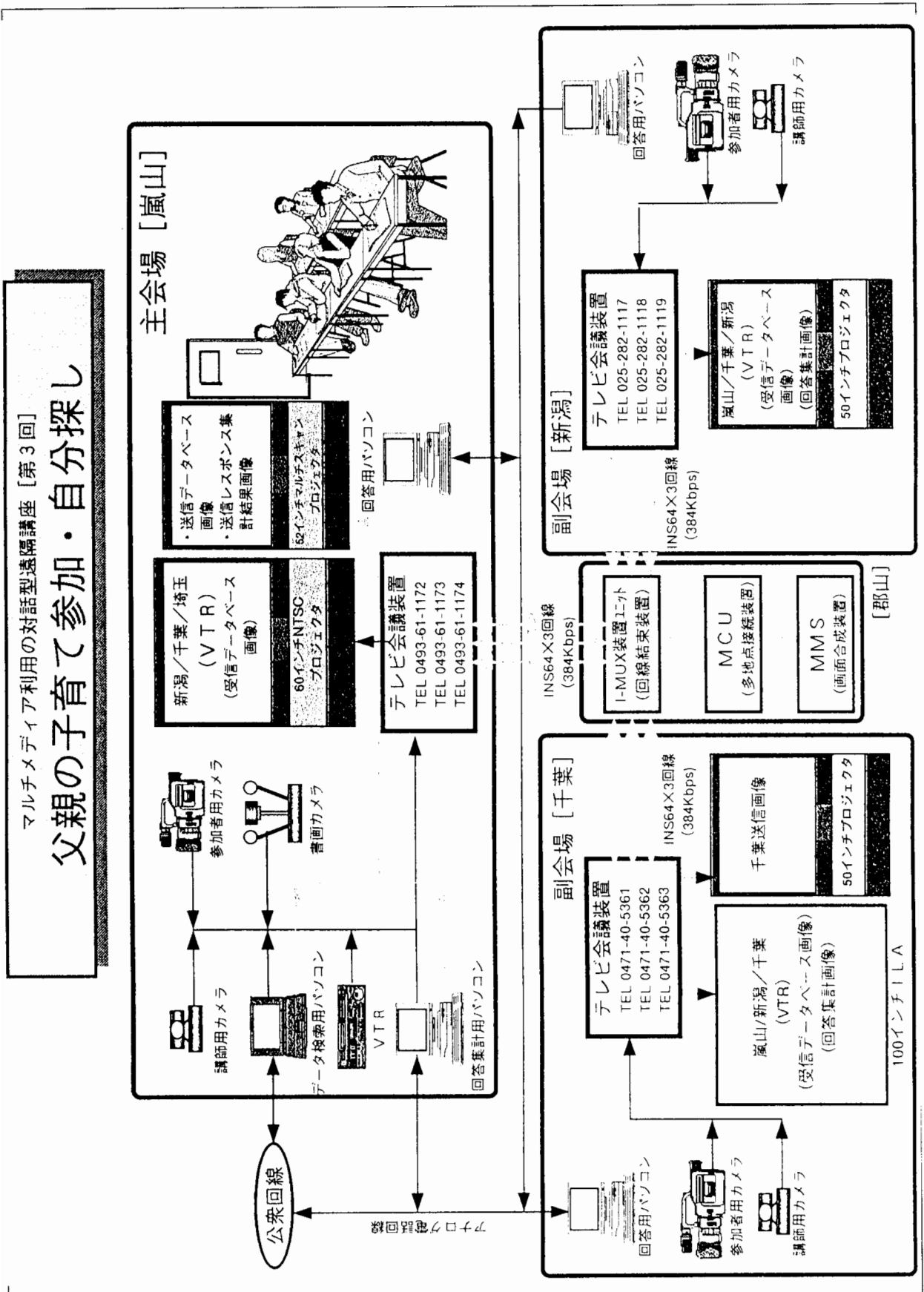
データベースについては、検索画面の表示をそのままプレゼンテーションに利用する場合、文字の大きさ、画像の精度において、課題が残った。また、幅広い利用に対応するために、データ量と種類の早急な拡充が必要である。

(事業課研究員 中野洋恵 情報交流課専門職員 佐多正子)

(遠隔講座のポスターより)



(遠隔講座システム概念図)



国立婦人教育会館ボランティアの活動

1. 会館ボランティアについて

国立婦人教育会館ボランティア（以下、会館ボランティアという。）は、昭和53年8月に登録・活動を開始して以来18年間、さまざまな形でボランティア活動を続けてきた。会館では、ボランティア活動の4原則（自発性、無償性、公共性、開発・先駆性）を基本に置き、「女性の能力開発」及び「女性の社会参加」を促進する活動としてボランティア活動を奨励している。平成9年2月現在、会館ボランティアの登録は、個人登録66名、グループ登録10グループである。

会館ボランティア活動は、会館利用者の多様な学習活動に対応した効果的な会館事業運営への協力という点において、利用者の立場にたった運営支援をしたり、会館事業の広報をしたり、生涯学習活動を援助したりするなど、その果たす役割は大きい。

2. 活動内容

会館ボランティアの活動内容は、「主催事業運営への協力」、「日本の伝統文化の紹介を通しての国際交流」、「家庭・家族、女性に関連した新聞記事のクリッピング」、「テーマ別文献の常設展示」、「情報ミニコミ誌の発行」、「会館のロビーなどへの生け花展示」、「会館の施設見学案内」、「主催事業の記録写真の撮影」、「館内の環境整備」など幅広い。

会館には外国からの来館者も多いため、日本の郷土芸能を紹介する和太鼓演奏や民謡・舞踊紹介等の実技提供グループでの活動やホームスティ、ホームビジットの受入れ等、地元とのつながりが深い活動もある。

会館ボランティアの活動は、定期的及び計画的に行われているものや、来館し活動を通して気付いたことをその場で行うもの、会館利用者からの依頼によるもの等さまざまである。会館ボランティアは、常に前向きな姿勢で主体的に活動し、会館の機能を充実させていく上で大きな成果をあげている。



主催事業の受付



ホームスティでの様子

3. 活動状況（主な活動の12月までの統計）

★主催事業・受入れ事業に関する活動

活動内容	回数
受付・会場整理・マイクまわし	76
広報	9
国際交流関係	10
施設見学案内	63
幼児の世話	8
文化活動	44
備品用具等の点検	15
プール監視	0
交流・話し合い	6
その他・自主活動	4
計	235

★情報に関する活動

活動内容	回数
サイン整備	20
新聞・パンフレット類の整理	36
新聞・雑誌・クリッピングの作成と整理	275
図書の整備	53
広報活動	65
その他・展示	4
計	453

★広報活動・環境整備に関する活動

活動内容	回数
「会館ニュース」関係	16
館内の環境整備	1



託児風景



講堂のステージや本館ロビーを飾る生け花



郷土芸能の紹介



利用者への七宝焼の指導

4. 研修

会館では、ボランティア活動の充実・発展を図るため、ボランティアと職員の研修を行い、相互の理解を深めることをねらいとして、「国立婦人教育会館ボランティア活動研究会」を毎年1回開催している。この研究会は、1年間の会館ボランティア活動を見直し、問題点を顕在化させ、次年度の新たな活動にむけてのステップとなる役割を果たしている。また、会館ボランティアは、研修の機会として会館の主催事業のうち、公募事業のほかに、女性の国内交流集会への参加と会館が事前に示した講演等を傍聴することが出来る。

《参考》平成8年度国立婦人教育会館ボランティア活動研究会開催要項より

テーマ：「社会教育施設におけるこれからのボランティア活動を考える」

－開館20周年にむけて－

	時 間	方 法	テ ー マ	講 師 等
平成 9年 3月 4日 (火)	10:10 } 11:00	説 明	「国立婦人教育会館における ボランティア活動」	次長 庶務課長 事業課長 情報交流課長
	11:10 } 12:00	報 告	研修報告「婦人教育施設を訪問して」	会館ボランティア
	13:00 } 14:00	講 義	「20周年をむかえるにあたり、 会館ボランティアに期待するもの」	国立婦人教育会館 館長 大野 曜
	14:10 } 15:25	分散会	「私が会館ボランティアとして できることを語り合おう」	

なお、会館ボランティアは学習グループを組織し、会館における活動に必要な知識や能力を高めるための学習を自主的に企画し進めている。

また、本年度は、これまでの活動の歩みをふりかえり、今後のボランティア活動のあり方を考える目的で、国内の女性関連施設への視察を実施した。

【平成8年度国立婦人教育会館ボランティア活動研究会の様子】



講義を熱心にきく会館ボランティア



質疑応答



視聴覚機器を使って研修報告



分散会での活発な意見交換

5 その他

会館ボランティアの活動は、基本的には会館を活動場所としているが、最近では会館の主催事業以外の行事への自主的参加活動の機会も増えてきている。

本年度は、「世界女性みらい会議」（主催：埼玉県）、「第2回全国ボランティア活動推進連絡協議会」（主催：文部省）、「第28回全国ボランティア研修集会・彩の国大会」（主催：日本青年奉仕協会）等で、展示活動、ワークショップ・分科会の企画運営、事例発表、受付、会場整理、障害者のサポートなどの活動を行った。

（事業課専門職員 安田いく代）